

て某は、生々世々の怨みと思ふぞ」と諭せば、妻は涙ながらに良人の意を諒しつゝ、何くれとなく後々の事まで思ひ定めて、夜も早や深更に及んだ所が、急に君よりの御召があつたゆゑ、杉田壹岐は豫ての覺悟と、驚かず騒がず、支度を調べて早速登城すると、君には直様壹岐を寢室に招いて「オ、壹岐！能くぞ參つて呉れた、今日の其方の諫言、深く思ひ廻らせば、手に取ての大善知識、過分に思ふぞよ」壹岐は意外の忝なさに感涙に咽びて何の返答も出ななだが、君には猶も言葉を繼いで「餘り心にかゝりて、寝るにも寢られぬ故に、夜陰に及んで其方を召したぢや、恕して呉れよ是れ壹岐！」と仰せられて、佩刀一振りを賜ふたので、壹岐も益々感激して厚く

君の御仁慈を謝し、親しく四方山の物語など申上て退いたとの事であるが、徳川家康の所謂「直諫の功は一番鎗に勝ること數等」である。

### 其六十六 因果の車

修證義に、因果を知らず業報を明らめず、三世を知らず善惡を辨へざる者は、皆邪見の輩であるから、決して斯る者に接近し同類となつてはならぬと、承陽大師は誠められた事であるが、世には其邪見の輩が中々多くて困るのである。

昔支那に莊子と云ふ有名な道學者があつた、梁の蒙縣の人で本名を



莊周と云ふたが、嘗て楚の威王が其賢を聞いて使を遣はし、迎へて  
 相たらしめんとしたけれど、莊子は笑つて之を辭退し、終身仕へな  
 かつたと云ふ程の人物である、此人が或時道中すがら、廣い澤の中  
 に一羽の鷺を認めて之を打たんと思ひ、杖を振揚げてツツと近寄る  
 ところが、鷺は一向に動く氣色も無いのみか、何か一心に狙ひつゝ、  
 ある様子に、莊子も大に不審りつゝ、彌々接近して、能くく邊りを  
 探り見るに、一匹の蝦が其前に在つて、他の小蟲を食はんとして居  
 るのであつた、其處で莊子は大に驚いて翻然悟を開いた、蝦は小蟲  
 を狙ふが故に己が身に降りかゝる危難を知らず、鷺は又蝦を得んと  
 するが爲に自ら危害を蒙むるに氣附かないのである、然すれば我は

又鷺に心奪はれて如何なる苦患を招くやも計られずとて、遂に逃げ  
 歸つたと云ふが、莊子の此開悟は實に千鈞の力があると思ふ。  
 大寶積經に「假令百劫を経るとも所作の業滅びず、因縁會遇のと  
 き果報還て自ら受く」とある通り、原因には必ず結果あり、而も惡  
 因には惡果、善因には善果と、毫釐も違はぬ業報を受けねばならぬ  
 のであるから、徒らに私心私慾を逞うして己が身を滅ぼす様な災を  
 招いてはならぬ。(注意、鷺や蝦が他の物を狙つたゆゑ、自分も亦狙  
 はれたと云ふ上には、因果の關係は無けれども、他を狙ふ一方に心  
 を委ねて己が身の用心を怠り、其れが爲に他の狙ひを受くる間隙を  
 生じたと云ふ上に、因果の關係が成立するのである)



其六十七

徳川家康と本多忠勝

徳川氏四天王の一人に本多平八郎忠勝と云ふ勇士があつた、忠勝は長久手の戦に主君家康より小牧山の守備を命ぜられ、石川伯耆守數正、酒井左衛門尉忠次等と俱に任務に就て居たが、敵將秀吉の大軍長久手に向ふを見て、忽ち手兵僅かに五百を率ゐて飛出し、小川一筋を隔て、敵の大軍を控へながら、獨り悠々と馬を川中に乗入れ、乗馬に水を飲まして泰然と構え居る面魂の、流石の敵將秀吉をしてアツと叫ばしめ「五百にも足らぬ手兵を提げ、吾が八萬の大軍に對ひながら、かくも沈勇の態度を示すは、世にも床しき武將かな、あ

たら勇士を打つな殺すな」と制せしめし程の豪の者であつたが、さる所の戦争にドン／＼と敵の城砦を攻め立て、今一と息で陥落すると云ふ一刹那、主君家康は何思ふてか俄かに號令を下して、退軍せしめた、平八郎忠勝は怒つたの怒らないのぢや無い、眞赤になつてヂダンダ踏んだが、主君の指圖であるゆゑ詮方なく、退却はしたものの、如何にも残念で堪らず「何故の退軍で御座るか、今一と打で城は陥落するものを」と家康に喰つて掛ると、家康は莞爾笑つて「其事は此家康も能く存じ居れど、若し不幸にして其方の様な、勇士を失ふ事にもなるならば、彼な小さな城の一つや二つに、何で代へることが出来やうぞ、其れゆゑ退却せしめたのぢや」と仰せられ



たので、流石豪氣の忠勝も、鬼の眼に涙とやらで、人目も構はず、  
 ラ〜と落涙して、かゝる仁慈の主君の爲には、何時一命を捧げて  
 も、決して惜くは無いと覺悟したと云ふが、此君にして實に此臣わ  
 りだ、嘗に主従のみならず、父子兄弟親族朋友と雖も、皆斯くあり  
 たいものである、されば忠勝が老病相革まつて、臨終に迫つた其  
 時に、家族一同枕邊に侍つて、何か遺言にてもあるならばと尋ねた  
 ととき、忠勝は何も云ひ置くことはなけれど、一首辭世を遺さうとて  
 「死にともな、あゝ死にともな、死にともな」と上の句を詠たので、  
 子供等も大に驚き、日頃豪氣の父上であつたが、病の故か氣が狂ふ  
 たのかと、怪しみながら下の句を待て居ると「御恩を受けし君をお

もへば」と附加へられたから、一座大に感激して熱き涙を灑いだと  
 云ふ事であるが、如何にも其通りで、自分一個としては決して惜く  
 もあらぬ身なれど、御恩を受けし君が爲には、惜みても猶餘りある  
 と云ふ其精神が、取も直さず佛心なり菩提心なりである、所謂不惜  
 身命の意味を誤解してはならぬ。

この處を承陽大師は「此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべ  
 き形骸なり、此行持あらん身心自からも愛すべし、自からも敬ふべ  
 し、我等が行持に依りて諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するな  
 り然れば則ち一日の行持是れ諸佛の種子なり諸佛の行持なり」と  
 仰せられたのである。



其六十八

程嬰と許臼

晋の趙朔が屠岸賈と云ふ者に滅ぼされたとき、趙朔の夫人は懷妊して居た、其處で趙朔の恩顧に預つて居た程嬰と許臼とが相談して、御恩の報じ所は此處であるからと云つて、若し夫人の御子が女子ならば、趙家の運の盡きと諦らめて、お互に自殺して果つる事に爲し幸にも男子であつたならば、假令骨身を削つても其子を養育して、天晴れ趙家を再興するやうに致さうと約束して、今日か明日かと夫人の安産を待て居たが、幸ひ月満ちて生れ落ちたのが玉のやうな男の子、夫人は固より程嬰や許臼の喜びは何に喩へやうもなく、

たゞ、趙家の萬歳を祝したのであつたが、其れにしても此子を育つるには飽くまで敵の目を掠めねばならぬが、其れには二人の中一人が外に身代りの子を養ふて、夫人の子と詐つて其子と俱に死ぬのが好らう、然すれば如何に疑ひ深き眼でも、趙家の血統は斷絶したと信じて、必ず安心するに相違ないから、其油斷に附込んで残る一人が此子を養育して、時節を待つて徐ろに事を謀る様に致さうと協議した、其時許臼が云ふには「然らば拙者は其容易き方を取て、身代りの子と俱に死するゆゑ、貴殿は迷惑ながら生き永へて、何うぞ此子を育て上げ、趙家の再興を計つて貰ひたい」との事であつたら、程嬰も快く引受けて生き残る事になつた、で、許臼は早速身



代りの子<sup>こ</sup>を連れて密<sup>ひそ</sup>かに隠<sup>かく</sup>れて居<sup>を</sup>ると、かゝる事<sup>こと</sup>とは夢<sup>ゆめ</sup>にも知<sup>し</sup>らぬ敵<sup>てき</sup>方<sup>がた</sup>では、鵜<sup>う</sup>の目<sup>め</sup>鷹<sup>たか</sup>の目<sup>め</sup>で趙<sup>てう</sup>朔<sup>さく</sup>の遺<sup>い</sup>兒<sup>じ</sup>を捜<sup>さう</sup>索<sup>さく</sup>して居<sup>を</sup>るから、程<sup>てい</sup>嬰<sup>い</sup>は是<sup>こ</sup>れ幸<sup>さい</sup>ひと敵<sup>てき</sup>を欺<sup>あざむ</sup>いて、拙<sup>せつ</sup>者<sup>しや</sup>は従<sup>じう</sup>來<sup>らい</sup>力<sup>ちから</sup>と恃<sup>たの</sup>んだ趙<sup>てう</sup>朔<sup>さく</sup>に別<sup>わか</sup>れて、今<sup>いま</sup>は路<sup>ろ</sup>頭<sup>とう</sup>に迷<sup>まよ</sup>ふて困<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>するが、併<sup>しか</sup>し趙<sup>てう</sup>氏<sup>し</sup>が遺<sup>い</sup>兒<sup>じ</sup>の隠<sup>かく</sup>家<sup>け</sup>は知<sup>し</sup>つて居<sup>を</sup>るゆゑ、若<sup>も</sup>し拙<sup>せつ</sup>者<sup>しや</sup>に千<sup>せん</sup>金<sup>きん</sup>を恵<sup>めぐ</sup>み下<sup>くだ</sup>さらば、必<sup>かな</sup>ず御<sup>ご</sup>案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>を致<sup>いた</sup>ませう」と云<sup>い</sup>つた、すると敵<sup>てき</sup>は大<sup>おほ</sup>に喜<sup>よろこ</sup>んで、速<sup>すみ</sup>に其<sup>その</sup>金<sup>かね</sup>を與<sup>あた</sup>へて隠<sup>かく</sup>家<sup>け</sup>を案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>させて、許<sup>きよ</sup>白<sup>やく</sup>と身<sup>み</sup>代<sup>が</sup>りの子<sup>こ</sup>とを殺<sup>ころ</sup>して仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>つた、其<sup>その</sup>處<sup>こ</sup>で程<sup>てい</sup>嬰<sup>い</sup>は計<sup>けい</sup>畧<sup>りやく</sup>の圖<sup>づ</sup>に當<sup>あた</sup>つたのを喜<sup>よろこ</sup>びながら、其<sup>その</sup>千<sup>せん</sup>金<sup>きん</sup>を養<sup>やう</sup>育<sup>いく</sup>費<sup>ひ</sup>に充<sup>あ</sup>て、趙<sup>てう</sup>朔<sup>さく</sup>の眞<sup>しん</sup>實<sup>じつ</sup>の遺<sup>い</sup>兒<sup>じ</sup>と俱<sup>とも</sup>に、十<sup>じゅう</sup>五<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>間<sup>かん</sup>深<sup>しん</sup>山<sup>さん</sup>に立<sup>た</sup>籠<sup>こも</sup>つて居<sup>ゐ</sup>た、而<sup>さう</sup>して時<sup>じ</sup>機<sup>き</sup>の到<sup>たう</sup>來<sup>らい</sup>するのを待<sup>まち</sup>て遂<sup>つい</sup>に晋<sup>しん</sup>の景<sup>けい</sup>公<sup>こう</sup>に説<sup>と</sup>いて助<sup>じよ</sup>力<sup>りき</sup>を仰<sup>あほ</sup>ぎ、芽<sup>めで</sup>出<sup>で</sup>たく趙<sup>てう</sup>家<sup>け</sup>を再<sup>さい</sup>興<sup>こう</sup>して其<sup>その</sup>

子<sup>こ</sup>を立てたのである、之<sup>こ</sup>れが世<sup>よ</sup>に趙<sup>てう</sup>武<sup>ぶ</sup>と云<sup>い</sup>はれたる人<sup>ひと</sup>であるが、か<sup>か</sup>くて趙<sup>てう</sup>武<sup>ぶ</sup>は程<sup>てい</sup>嬰<sup>い</sup>と共に敵<sup>てき</sup>の屠<sup>と</sup>岸<sup>がん</sup>賈<sup>か</sup>を滅<sup>ほろ</sup>ぼして、首<sup>しゆ</sup>尾<sup>び</sup>克<sup>く</sup>く父<sup>ちち</sup>の讐<sup>あだ</sup>を報<sup>はう</sup>じたのであつた、其<sup>その</sup>處<sup>こ</sup>で程<sup>てい</sup>嬰<sup>い</sup>は最<sup>も</sup>早<sup>はや</sup>や此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>に思<sup>おも</sup>ひ置<sup>お</sup>くことが無<sup>な</sup>いので、早<sup>まっ</sup>速<sup>そく</sup>此<sup>この</sup>の事<sup>こと</sup>を草<sup>くさ</sup>葉<sup>は</sup>の影<sup>かげ</sup>の、舊<sup>きう</sup>主<sup>しゆ</sup>趙<sup>てう</sup>朔<sup>さく</sup>や親<sup>しん</sup>友<sup>ゆう</sup>の許<sup>きよ</sup>白<sup>やく</sup>に知<sup>し</sup>らせやうとて、趙<sup>てう</sup>武<sup>ぶ</sup>に暇<sup>いとま</sup>を願<sup>ねが</sup>ふた所<sup>ところ</sup>が、趙<sup>てう</sup>武<sup>ぶ</sup>は産<sup>うみ</sup>の親<sup>おや</sup>にも優<sup>ま</sup>して大<sup>だい</sup>恩<sup>いん</sup>ある程<sup>てい</sup>嬰<sup>い</sup>に、何<sup>なん</sup>で自<sup>じ</sup>殺<sup>ころ</sup>がさせられやう、泣<sup>な</sup>いて其<sup>その</sup>手<sup>て</sup>に取<sup>とり</sup>籠<sup>こも</sup>り、只<sup>ひた</sup>管<sup>す</sup>思<sup>し</sup>ひ止<sup>とど</sup>ま<sup>ま</sup>るやうと勸<sup>すす</sup>めたけれど、遂<sup>つい</sup>に振<sup>ふ</sup>放<sup>はな</sup>つて自<sup>じ</sup>害<sup>がい</sup>したと云<sup>い</sup>ふが、實<sup>じつ</sup>に生<sup>い</sup>くべき時<sup>とき</sup>に生<sup>い</sup>き、死<sup>し</sup>すべき時<sup>とき</sup>に死<sup>し</sup>するが、花<sup>はな</sup>も實<sup>み</sup>もある忠<sup>ちゆう</sup>臣<sup>しん</sup>義<sup>ぎ</sup>士<sup>し</sup>と云<sup>い</sup>ふべきである、常<sup>じやう</sup>濟<sup>さい</sup>大<sup>だい</sup>師<sup>し</sup>も「道<sup>みち</sup>ありて死<sup>し</sup>するとも、道<sup>みち</sup>なくして生<sup>い</sup>くること勿<sup>な</sup>かれ」と仰<sup>あほ</sup>せられた。



### 其六十九 唯心の所造

法華經には「三界は唯だ一心のみ、心の外に別法なし」とあり、又施食文には「若人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性は一切唯心の造なりと観ずべし」とあるが、實に「傀儡師首に掛けたる人形箱、佛出さうと鬼を出さうと」だ。

昔唐の高宗の時、六祖大師が南海の法性寺に止宿せられ、一日強風起つて喧しく刹旛を颺るに逢ふた、すると二人の僧侶があつて、頗りに何か議論を闘はして居るので、大師は何事ならんと立聞きするに、一人の僧が旛が動くと言へば、他の者は風が動くと言張して、

甲論乙駁中々決しない、問題は無論風が動くか旛が動くかと云ふにある、若し旛が動くとするれば長持の中にしまつてある旛でも動かねばならず、又風が動くとするれば旛は飽くまで静まつて居なければならぬ、然るに風なき箱の中の旛が翻つた例もなければ、風の中に掛つて居る旛の動かなかつた例も無い、サア何方が動くが本統か六祖大師は片唾を呑んで聞いて居たが、二人とも其論ずる所が理に契はない、其處で大師は二人が中へ割つて這入り、「失禮ぢやが、風が動くのでも無ければ、旛が動くのでも無い、皆各々の心が動くのぢや」と示されたと言ふが、成程心頭を滅却したならば、風が動くも旛が動くもあつたもので無い。



又唐朝の僧侶に元曉と云ふ者があつた、一とせ諸國行脚の砌りに或る墓原に野宿したが、夜半頗る渴を覺えて抑へ難さに、コソコソ邊りを搜索して水を覓ると、幸ひ一個の器物に水精の如き水の溜り居るを發見して、天の興へと喜びつゝ、只一口に呑み乾せば、實に甘露の味を覺えて愉快至極、其儘グツと眠りに就て好い心地に夢を食つたが、翌朝起き出で、能く見えた所が、之れはしたり驚いた、昨夜甘露と思ふた水は、罽體の中に溜つた雨水であつた、元曉之を見ざるや否や急に嘔吐を催したが、さて今更取返へしは附かぬ、渠は稍々暫し沈思黙考した、而して翻然大悟して斯く叫んだ、心生ずれば則ち種々の法生じ、心滅すれば則ち罽體不二なり」と。

其七十 安宅關の辨慶

文治三年二月二日、源義經は龜井六郎重清、武藏坊辨慶等十餘人を従へて、兜巾、篠掛、笈、金剛杖と、山伏修験の調度に身を堅めて、年久しくも住馴れし九重の帝都を後に、細布衣合ひ兼ぬる奥州指して落ち玉ふた、云ふまでもなく讒者の爲に罪を得て、鎌倉公の怒りに觸れたからである、途中關所々の嚴しい吟味に、無念の涙を灑がれしことも幾度か、如何に有爲轉變の世とは云へ、昨日は金殿玉樓の内に花を愛で月を弄びし御身が、今日は山川曠野の草枕、露踏み分くるいとほしさ、餘所の見る目も哀れ至極、今しも安宅の關



に近づく折から、先に立つて進みし喜三太と云ふ者、顔色變へて驅戻り「方々大變で御座る、安宅にも關を築いて富樫之介家直之を守り、嚴しく山伏行者を吟味するとかにて、關門に山伏三名の首を晒らし居りませう」と太息を吐いての注進に、義經歎息し玉ふて「斯く行先毎に關所ある上は、所詮奥州までは行かれまじ、言甲斐なきもの、手に、かゝつて最後を遂ぐるより、潔く此場に自害を爲さん」と、既に刀に手を掛け玉ふゆゑ、龜井六郎遠て、押し止め「是れは如何なる御短慮ぞや、憚りながら拙者ども、かく隨從仕る上からは、關所の二個所三個所、蹴破つて通らんこと、何の雜作が御座らうや、必ず御短慮遊ばすな」更に一同を振返つて「如何に方々、太刀腹卷

安宅關の辨慶

はかゝる場合の用意で御座る、皆一齊に驅け破り、若も叶はぬ其時には、多年の恩顧に報いん爲め、一同腹掻き切つて相果てん」と敦圀くを、辨慶諫めて「是れはしたり龜井氏、物に狂ひし御氣色とも存せず、是れまで諸所の關所をば、難なく免れし我々主従、此關一つを通りかね、無謀の振舞ひ爲すと云ふは、智慮に淺しと申すもの、萬事拙者に任されよ」とて、辨慶は眞先きに立つて恐るゝ氣色もなく、安宅の關に這入つた所が、百人餘りの番卒は「其れヤこそ山伏御參なれ」と、また、く内に追取卷た、辨慶は眼を瞋らし聲鋭く「何故あつての此狼藉、返答次第で容赦はならぬぞツ」ヤア、吠牙えたりな山伏行者、九郎判官偽山伏となつて、奥州へ罷り下るゆゑ、搦



捕つて差出せと、鎌倉殿の嚴命に依り、富樫之介家直殿、當關所を  
 固め居らるゝのだ、思ふに汝等が爲體、義經主従にさも似たり、關  
 守殿の糺明濟むまでは、此處一寸も動くこと罷成らぬ、強て動くと  
 あるならば、ア、見られよ、關門に晒さし首の如く、汝の首も晒し  
 て呉れるぞツ」「然らば彼處に晒さし山伏の首は、九郎判官義經殿  
 か」空とぼけて尋ねれば、番卒嘲笑ひつゝ、「判官ならば何で餘人を  
 糺さうや、渠等は強て通ると狼藉せしゆゑ、名もなき輩の首なれど、  
 餘人の見せしめ切り捨てたのぢや」聞いて辨慶カラ、「と打笑ひ、  
 「世にも無法の振舞ひかな、併し、いかに斬らるゝが恐ろしとて、  
 通るべき所を通らで濟むべき」云ひつゝ、一行の者を顧みて「如何に

方々、拙者は當關守殿に對面し、寄進を乞ふて後より追附く程に、  
 方々は先へ通つて諸所を勸進せし上、日脚もあらば能登までお越し  
 下され」と、何氣なき體に傳へたれば、番卒大に怒つて、「是は理不  
 盡なる山伏奴、強て通らば目に物見するぞツ」と今にも飛掛らん面  
 魂に、辨慶も一入聲勵まし「忝なくも勅命を承けて、日本六十餘  
 州を勸進なす我々に、鏑矢一本たりとも當て、見よ、誰彼の容赦は  
 なく、其分には差措かぬぞツ」と、仁王立に成つて呼はつた、關守  
 富樫家直は折しも三月三日の事故、奥にて酒宴の最中なりしが、此  
 物音に驚いて立出たれば、辨慶得たりかしこしと、「我々は南都東大  
 寺の大佛殿再建の爲め、諸國勸進に巡行なす山伏なるに、當關所の



者ども是非も糺さず狼藉するは、貴殿の指圖か但し又、渠等が私の計ひなるか」と詰問したれば、富樫は面を和げて「其れはく心なき番卒共の失禮千萬、實は此頃九郎判官殿、山伏修験に身を糺し、奥州指して御下向ある由、其れゆゑ當關所に於て、山伏達を詮議致し居れば、勢ひ番卒共が不禮の雜言仕りしと存ずる、が、其儀は拙者に免じて、平に御宥恕下されたし、して貴殿の御名は何と申さるゝや」と問ふに、辨慶すかさず「愚僧は讚岐阿闍梨と申すものゝとあつて、是れより成田屋十八番の勸進帳を朗讀した所が、富樫も大に感激して早速加賀絹五十疋を寄進した、其他内室子息に至るまで其れく相當の寄附があつたから、辨慶も大に喜んで富樫

に暇を告げ二人三人づゝ徐々と通抜けたが、中にも義經は遙か下つて過ぎ玉はんとするを、番卒の中に見知りたる者あつて「彼れこそ判官殿にさも似たり、篤と詮議を爲されませ」と呼はつたので、一同アツと打驚き、コハ一大事コハ大變と、顔色變へて狼狽へ騒ぐを、辨慶眼で制しも敢えず、義經公の前に立寄つて、眼を瞋らし聲荒らげ「狭山伏の腰拔奴が僅かの荷物を持めぐみ、何を愚圖く致し居る、疾く歩まぬか早く行け」と叱り附けて連れ行くを、番卒共、イヤお待ち下され、判官殿に似たる面貌、吟味の筋あつてお停め申した、貴殿にも尋ぬる仔細あれば、暫しお停まり下されよ」と支えたので辨慶益々腹を立て「南都出發以來、動ともすれば判官よ、九郎



義經よと疑はれ、渠が爲に時日を移すこと僅少ならず、是れと云ふのも渠奴が、起居振舞ひの柔弱ゆゑ、所詮諸國を巡らんに、足手纏の痴者なれば、來月下向の其節まで、暫し當所に預り下され、思へば腹立しき山伏や」と、金剛杖を逆手に振上げ、所構はず散々に打すゑるので、富樫も見兼ねて之を制し、「わらぬ疑ひ懸けしゆゑ、斯く入らざる責折檻、今は疑ひ晴れたれば、疾くお連れ下されたしとの事に、辨慶飛立つ喜びを態と隠し、「大檀公の仰せならずば、打殺しても棄んものを、生命冥加な痴者奴」つぶやきながら辨慶は義經公をお連れ申て、首尾克く虎口の難を免れ、路を急いでトある藪陰に立休らひ一同息繼ぎ胸撫下したが、辨慶涙ながらに義經の御前

に平伏して、「君の御運の衰へさせ、如何に計畧とは申ながら、辨慶が杖に當らせ玉ふ悲しさつらさ。千斤も重しとせざる此腕も、痺るゝ如くに御座りました、何卒お赦し下されたし」と詫び入れば、義經も涙片手に「何の、今日其方の智略、凡人の及ぶ所にあらず、偏に宗廟八幡大菩薩、汝が手を借給ふて、義經が危急を救はれしに相違なし、穴難有や貴や」とあつて、俱に打連れ行過ぎたと云ふが、臣にして君を打つた辨慶が、臨機應變の智略は、實に殺活自在の活手段であると思ふ。(源平盛衰記参考)

其七十一

クリストとペートル



基督教の物語に斯う云ふ話がある、イエス、クリストの弟子にペートルと云ふ者があつたが、渠は中々の信者であつて、多くの弟子中に於ても一頭地を抽んで居た、併しまだ凡夫の猿間しさには洒落脱塵の境界に入る事が出来ないで、名利の念は随分盛んであつた、其れゆゑ生涯に一度は必ず神様になりたいと、平常渠は口癖のやうに云ふて居たが、或時師匠のクリストと近郊を散歩しつゝ、例の如く神になりたいと叫ぶゆゑ、クリストが「そんなにお前は神になりたければ、私が許すから明日の朝まで成るが好い」と云はれた、其處でペートルは大喜びで、俄かに神になつた了簡で、意氣揚々とクリストに従ふて歩いて居た、するとある村落に來た所が、

鎮守の祭禮でもあるのか、森の此方に狂言の舞臺があれば、向ふの方には見世物小屋もある、多勢人が集つてドンチャンと大騒ぎ、其賑かさと云つたら形容の爲やうも無い程である、すると一人の百姓が家に飼つてある小豚を、路傍に遊ばせたまゝ出て行かうとするから、ペートルは「是れ、お前こんな所へ豚を放して置いて、人にも盗まれたら何うする？」と云つたらば、百姓は平氣で「ナニ神様がチャンと守護して下さるから、そんな心配は入りませんと云ひつゝ、ツカ」と往つて仕舞つた、其處でクリストは莞爾笑ひながらペートルを顧みて、「サア神様、貴方の御用が出来ました、ペートルならばいざ知らず、神様になつた以上は捨て、は置け



ない、今夜一晩此處で番をするが好い、併し御苦勞千萬、宜う頼んだよ、私は村へ往つて、祭禮の御馳走にでも有附いて來やう」と云つて、往つて仕舞つた、跡に取殘されたペートルは、泣出しさうな顔をしたが仕方が無い、とうとう一晩我慢をしたと云ふ事である。ペートルばかりでは無い、誰しも神や佛になりたいであらうが、併し其任務を果すのは矢張り嫌であらう、其んな横着な神や佛は、如何程澤山出來ても何の役にも立たぬ、承陽大師の所謂「設ひ佛に成るべき」功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に渡して、自からは終に佛に成らず、但し衆生を渡し衆生を利益するもあり」と云ふやうな、難有い佛が澤山欲しいのである。

其七十二 兆殿司の一心

昔、我が足利中葉の時代に兆殿司と云ふ有名な畫家があつた、殿司は僧家の役名であつて、本名を明兆と稱へた僧侶である、此兆殿司は聖一國師の弟子であつて、幼少の頃より畫道に心を傾け、又天性の技能を備へて居た、日々炊事の役を負ひて、竈の前で火を焚きながら、火箸で灰を平しては畫を書いて居る、其れが爲に御飯が焦附いてお釜の尻が眞赤になる事も幾度か、時に依ればお釜の蓋まで火にする事もある、其度毎に師匠の聖一國師から嚴しい切諫を受ける



けれど、唯だ其時ばかりで何の利目も無い、餘りの事に師匠も呆れて、一日「最早や其方の様な無道心ものは、一刻も寺に置く譯には行かぬから、何處へでも出て行け」と叱つたので、涙ながらに兆殿司は「洵に申譯は御座いませぬ」と兩手を着いて、「お師匠様、もう決して書は書きませぬ、此度と云ふ此度こそは、必ず精神を改めまして、今後は假令何の様な事がありましても、書も書きませぬば御飯も焦しは致しませぬ、何ぞ御了簡下さいませ」と謝罪り入つたので、深く將來を誡めて、又一度宥して遣つたのである、すると其翌朝のことである、またもや臺所で焦げ臭い匂ひがするので、聖一國師は「ハテ困つた奴ぢや、昨日彼れ程云ふて聞かしたのに、性懲り

も無く復此始末、何と云ふ因果な奴だらう」と、ソツとお勝手へ出て行つて、障子の隙から覗いて見ると、不思議や炎々と燃え立つ焰の中に、利劔と繩とを握つた不動様が、アリ〜と現はれて居る、聖一國師は思はず珠數瓜繰つて、「ア、難有や大聖不動明王」と唱へると、即座に明王のお姿が、搔消す如くになつて、兆殿司は周章しく火を揉み消して居る、餘りの不思議さに聖一國師も、其日は其儘過されたが、其翌朝になると復もや例の如く焦げ臭いので、昨日の通り樟子の隙間から覗て見ると、今朝は竈の前に大きな牛が寐て居る、一目見るより國師は驚いてゾツとしたが、よく〜見れば其牛の頭は丸きり兆殿司の首玉であるから、更に師匠は二度吃驚、



矢庭に「兆殿司」と呼ばせらるると、兆殿司は「失策つた」と胸につぶやきつゝ、師匠を顧みて両手を附いた、國師は血の涙を絞りつゝ、「是れ！兆殿司、其方は畜生道に墮ちたのウ」「エ、」「如何に愚鈍な性質とは云へ、苟にも三衣を身に纏ふ其方が生きながら畜生道に墮つるとは、何たる淺ましい事ぢや」と口説き立つるを不審る兆殿司は「何をお仰いますお師匠様」と不審の眼を見張る故、聖一國師は昨日不動尊を拜した事から、今朝牛の姿に驚いた始末を、一伍一什説明すると、兆殿司は思はず両手を拍つて、「ア、有難や忝なや」と雀躍りする、國師は「馬鹿ッ、畜生道へ墮ちたのが何が難有い、何が忝いのぢや」「其驚きは御尤、之れには深き仔細が御座

れば、お腹も立たうが御師匠様、何うぞ一と通りお聞き下され、昨朝貴方は不動様を拜み、今日は牛を見たとお仰るが、如何にも昨日は私が、一心に不動明王の尊像を畫き、今日は大きな牛を畫きました。私が日頃の一心貫徹して、私の姿が不動とも、また牛ともなつたので御座いませう」と申上たので、聖一國師も感心せられ、落つる涙を拭ひつゝ、「其れ程好む道ならば、無理に留むるも詮ない事、是れより一心に丹精を凝らし、佛菩薩の御尊像を畫き、天晴れ天下の畫家となつて、畫道を以て衆生を濟度せよ」とお許しになつたから、兆殿司は飛立つ程に喜んで、日夜一心不亂に研究して、遂に古今無類の大家となつた、今兆殿司の眞筆と云へば、一寸したものでも幾



千圓と云ふ程賞美さるゝのである、其れに就けても人間一心の働きほど、世に恐ろしいものは無いと思ふ。

### 其七十三 仁徳帝の禮讓

神皇本紀に帝の御明德を斯う云ふ工合に記しまつて居る。  
天皇諱は大鷦鷯尊、應神天皇第四の皇子である、母を皇后仲媛命と申上た、天皇幼より聰明睿智、容貌美麗であつて、且仁寛慈惠の質に渡らせられた、四十一年春二月應神天皇は御崩御あらせられたが、皇太子菟道稚郎子の皇子は、位を大鷦鷯尊に譲つて仰せらるゝのに「凡そ天下に君として萬民を治め行くのは、天の蓋ふが如く地

の容るゝが如きものであつて、上驩心を以て百姓を使へば百姓亦欣んで之れに事ふ、此の如くにして天下は長く太平を保ち得るのである、然るに今予は弟にして且文献充分ならず、いかでか嗣位を繼いで天業に登る事が出来やう、大王は風姿岐嶷、仁孝遠く聞こえ、且つ齡も亦長じ玉へば、方今天下の君となるに堪えさせ玉ふ事である、先帝が予を立て、太子とし玉ふたのは、予に能才あつて然りしにはあらで、唯だ予を愛し玉ふ一念にのみ出でられた次第である、願ふに完廟社稷を奉ずるは重き事であつて、我等不佞の以て稱ふ處では無い、殊に昆は上にして季は下である、聖は君となり愚は臣となるは古今の常典、何卒王疑はずして帝位にお即き下さるべし、予

仁徳帝の禮讓



は臣となつて御補佐申上ん」と仰せられたれば、大鷦鷯命は「先皇詔り玉ふに、皇位は一日も空しかるべきに非ずとて、豫め明德を選んで王を立て、皇太子と定められ、之に祚しめ玉ふに嗣を以てし、之に授くるに民を以てし、且其寵章を崇めて國に聞こしめ玉ふたのである、我れ不賢と雖も豈先帝の命を棄て、王の願ひに従ふを得やうや」と固辭して承け玉はないので、各々相譲り玉ふこと三載の久しきに及んだ、此間皇太子は宮室を山城の菟道に建て、其處に在ましたのである、時に或漁民が鮮魚の苞に爲したるを齎して、菟道の宮に献上した所が、太子は「我れは天皇にあらざ」と仰せられて、其鮮魚を難波の大鷦鷯尊の許へ進めしめた、ところが大鷦鷯尊も亦返し

て菟道の宮へ奉らしめた、斯様にして往還する内に、鮮魚は遂に餒れて仕舞つたので、更に他の鮮魚を以て復た献上に及んだが、相譲り玉ふ事は前日の如くであつた、其れゆゑ之れも亦餒れて食する事が出来ず漁夫は往還に苦んで其魚を棄て、泣いた、太子は「我れ兄王の心を奪ふ能はざるを知る、生きて天下を煩はさんよりは、死して先帝に地下に謝せん」と仰せられて、遂に自害し給ふたのである、時に大鷦鷯尊は太子の薨じ玉ふと聞き、驚いて難波より馳せて菟道の宮に到り玉ふた時は、已に太子薨じ玉ふて三日目と云ふ日であつた、尊は胸を打て號叫し玉ひ、太子の御屍に跨つて「我が弟の皇子」と三たび叫ばせ玉ふた所が、尊の衷情太子に通じてか、「オ



「とお返答あつて自ら起きさせられた、尊は最も悲しげに太子に向て「何故自ら逝かせ玉ふや、死者若し知るあらば先帝我を何と仰せらるゝぞ」と歎かせ玉へば、太子は「是れ即ち天命なり、若し我れ先帝の御所に到らば具さに兄王の聖にして、且譲り玉へる事を奏し奉らん、許させ玉へ兄王！」とて、茲に同母の妹なる矢田皇女を尊に奉つて、「納采るゝに足らざれど僅かに掖庭の數に充て玉へ」と仰せられて、棺に伏して薨じ玉ふた、此に於てか尊は泣々素服して菟道山の上に葬り奉つた、而して元年春正月天皇の位に即きて、二年の春磐媛命を立て、皇后となし、皇后御崩御の後即ち三十八年に矢田皇女を立て、皇后となされたのである。

かけまくも綾にかしこき事ながら、兄王を立て、自ら補佐し奉らんと仰せらるゝ皇太子が、菩薩に渡らせらるゝとすれば、飽くまで先帝の御窺慮に基き、弟の皇子を御位に即かしめ玉はんとする大鷲鷄命は、佛の大慈に勝つた大御心と拜し奉るのである。

### 其七十四

### 悪言是功德

今より百年許り前に塙保己一と云ふ有名な檢校のあつた事は、疾くに皆承知の筈であるが、此保己一は武藏の人で通稱を辰之輔と云ふて居たが、七歳の時に明を失つた、で、絃歌の道に這入つたが成功せず、鍼法をも學んだけれども矢張り成らなかつた、其代り天性學



を好んで我が中世の事實には、通曉せざる事なしと云ふ有様であつた、嘗て東京麴町の平河町にあつた平河天満宮を信じて、如何な日にも日參を缺かした事はなかつたが、或日のこと折しも篠突く雨を冒して參詣の道すがら、運悪く下駄の鼻緒を切らしたから、其頃天満宮の境内に住んで居た版木師で、前川某と云ふ者の宅へ立寄つて、何うか鼻緒を一つ立て、貰ひたい」と云つたれば、其口吻の尊大であつたのが癪に障つたものか、前川は「小穢い按摩の癖に、」と云はんばかりの顔附で、錢のサシを一本投げつけて「ソラ其れでスゲて行け」と云ふと、保己一は何と思つたか下駄をスゲずに其サシと切れた下駄とを手に提げて、前川の職人共が「盲目根性と

能く云つたものだ」などと惡口するのを聞き捨て、跳足でツカ行つて仕舞つた、其後保己一は保元以降諸家の記録雜書などの、永く湮没して世に顯れないもの、總て千二百七十三種六百三十五巻と云ふ大層なものを校訂して、之を群書類從と名けて出版せんとするに當つて、前の前川と云ふ版木師を呼んで、「版木屋は世に澤山あるが、拙者は少し思ふ所存があるゆゑ、特に其方に依頼するのぢや」との事に、前川も大に喜び、斯く大冊の御名著を、御用仰せ附けらるゝ段、偏へに忝ら存じます」と三拜九拜すると、保己一は改めて、「時に其方に、折入つてお禮を云はねばならぬ事がある、最早や其方は忘却したであらうが、幾十年前の何月何日、平河天満宮の



境内で、篠突く雨の淤泥に、下駄を挫いて鼻緒を切りし、眼目の見えぬ悲しさに、何うか立て、貰ひたいと、其方の家へ立寄つて、只管頼んだ其時に、投附けられたは是れこのサシ、餘り仕打の情れなさに、是非天晴れの者となり、今の汚名を灑がにやならぬと、年月修業の功を積み、遂ひ今日の身分となつた、是れと云ふのも其方が、奮發心を附けて呉れたぢや、御恩は必ず忘れぬぞよ」とお仰つたので、前川も大に汗向背したと云ふが永嘉大師の所謂「悪言は是れ功德なりと観ずれば、則ち我が善知識となる」と證道歌に謠はれたのも、こゝらの事であらうと思ふ、今我等お互も斯る修養を積んでこそ、名を爲す事も出来得るなれ、よくよく心すべき事である。

其七十五 強慾なる酒賣婆

昔山城嵯峨の片田舎に能説房と云ふ説教師があつた、房は名詮自稱の能辯家で、頗る近郷近在の歸依を受けて居たが、其隣村に一文酒を商ふ考婆があつて、此老婆も房の信者であつた所から、屢々寺へも往來して始終難有い御法門を聽問して居たが、能説房はまた頗る附きの上戸で、酒樽の前を通つても涎を垂らすと云ふ有様であつたゆゑ、諸所の讀經や法談で得たる布施物は、悉皆酒手になつて仕舞うと云ふ始末、ところが或時例の酒屋の婆さんが法事を營むと云ふので、此能説房を招待して讀經を願ひ、且つ近傍の老若男女を集め



一座の説教を願ふ事にした、愈々當日となつて能説房が出掛けると、集つて居た近所の者が、婆さんの居ない所で窃かに能説房に向て、「此家の婆々は中々の慾張り者で、始終酒の中へ水を混ぜて賣りますから、何ぞ今日は御説教の序に、其罪惡の重い事を懇々とお諭しが願ひたい」と云ふゆゑ、能説房も宜しいと引受けて、いざ説教と云ふ場合に、淳々と其不都合を説明したので、一座大に歡喜して「今日こそは美味しい酒が呑めるであらう」と、一同咽喉を鳴らして待構えて居ると、愈々説教も濟んでお膳が出た、老婆は恭々しく御禮を述べて「何は無くとも御酒だけは十分に……」と拶拶をして、大盃で以て一同に十分勧めたので、上戸揃ひの一座はギク／＼と數杯を

傾けた、所が不圖氣が附いて見ると、如何にも酒の香氣が尠な過ぎるので、さてはと一同が老婆に聞いて見ると、眞面目くさつて老婆の云ふには「最前の御説教を拜聴しまして、酒の中へ水を入れるのは容易ならぬ罪惡だと、つく／＼之れまでの非を悟りましたから、今日はスツカリ心を入れ代へて、斷然酒の中へ水を入れるのを廢しまして、此度は水の中へ酒を入れる事に改良しました」と云ふたので、何れも開いた口が塞らなかつたと云ふが、こんな説教の聞きやうでは何の役にも立たぬ。  
「惡を造りながら惡に非ずと思ひ、惡の報あるべからずと邪思惟するに依りて、惡の報を感得せざるには非ず(修證義)」ぢや。



其七十六 法師と盜賊

昔或法師が山路を通行すると、闇い木立の影から一人の泥棒が飛出して、サア金銭を出せと云ふかと思の外、恭しく大地に両手を着いて、「見受ました所が、貴僧様には中々御高德なお方と存じます、したが、私は世にも稀れなる大悪人で御座いまして、是れまで人を苦しめた事は數限りも御座いませぬ、何とかして早く改心したいと存じます、持つて生れた悪心か、何うしても改心する事が出来ませぬ、何卒貴僧の御法力をもちまして、私の悪念が消滅して、立ろに善心が生じますやう、偏へにお助けが願ひたい」と申すと、法師は

「よし、其れや何の造作もない事、拙僧が之れから毎日御祈禱して遣はさう」と云つて、其儘別れて仕舞つた、すると其後のことである、此法師が復た以前の山路を通ると、同じ泥棒が出て来て法衣の袖に取纏り、「これ御出家、貴僧は何ぞや頼んだ御祈禱を、未だに爲て呉れませぬ」と、稍々立腹の體で詰責するのを、法師は不審げに「何を詰らぬ事を云ふのぢや、拙僧は彼の日から日々祈禱を續けて居るに……」と云ふと、泥棒は猶も聲荒らげ「イ、ヤ、然らで無い、見掛けに依らぬ、虚言吐き坊主奴、全く御祈禱をして呉れるのなら、少しは悪心も止まりさうなもの、然るに、未だ少しも止まぬばかりか、悪念日々に増長するわッ」と怒鳴り出した、する



と法師は突然「ア、苦しい、水を呉れッ、水を〜」と呻吟り出した、泥棒も不意の椿事に驚いて、「彼處に古井がありますから、私が縄で貴僧を釣下げて進ませせう而して水をお飲みなさいませ、好い時分には聲を合圖に引上げますから、何にしても困りましたなア」と、泥棒は法師を抱えて井戸端にゆき、約束通り縄で縛つて釣下げた、すると水を飲んだ頃、井戸の中から聲が掛つたので、泥棒は一生懸命で引上げやうとするが、何う云ふ加減か上らない、引けども〜如何なこと、縄は切れさうになつても身體は上らないので、あまりの不思議さに井中を覗いて見ると、「如何に上らぬも道理、法師は大きな岩に強摺いて居る、泥棒も呆れて「何です馬鹿〜し

い、何うも變だと思つた、そんな事をして居ては、イクラ一生懸命で引いたツて駄目ぢやありませんか、早くお離しなさい」と云ふと、法師は落着拂つて「さうかい、駄目かい」「駄目かいも無いもんだ、早くお離しなさいと云ふに」「イヤ然うは行かぬ、能く聞つしやれ、お前でも此通りだ、ナンボ拙僧が善心にして遣らうと御祈禱しても、肝腎要なお前が、悪念の岩に強摺いて居る以上は、兎ても助りツこは無い、お前が其岩さへ放せば、善心立ちに生じて、自然に助る事が出来るのぢや」と諭されたので、泥棒も始めて己が心掛けの悪かつたのに氣が付き、慌て、法師を引上げて、足下に手を着き涙ながらに、「冥加に餘る其御慈訓、肝に銘じて忘れは致しませ



四三〇  
ん、今後は必ず心を入れ代へて、急度善心に立返りますから、何卒御安心が願ひたい」と云つて、深く法師のお慈悲に感激して立別れたと云ふ。(イソツブ物語)

### 其七十七 伊達忠宗の短慮

「移りゆくはじめおはりは白雲の怪しさものは心なりけり」で、げに人間の心程當てにならぬ者はない、お互の心は恰も玉のやうなものであると考へたら好からう、始終、前後左右に轉がりづめであるから、自分ながら中々油断もならねば、又思ふやうにもならないのである、其れゆゑ「心猿飛び移る五欲の枝、意馬馳せ走る六塵の境」

などと云つて猿や馬にまで喩えらるゝのである。

仙臺藩主の祖先は彼の有名なる伊達中納言政宗公であるが、其二代目に忠宗と云ふ人があつた、而して其忠宗公の愛妾に容姿頗る艶麗なる某女と云ふのがあつたが、出生は泉州堺の者で、或商人の娘であつたが、童に容貌の秀麗なばかりでなく、随分智恵才覺もあつた女で、云はば才色兼備の質であつたから、忠宗公の寵愛もなみくでは無く、遂に玉の如き男兒まで産み落した程であつたが、其男兒が即ち綱宗公であつた、従来忠宗公の本妻には子が無つたゆゑ、妾腹ながらも綱宗公が家督相續人となつた譯であるが、最初綱宗誕生の時、父忠宗が思ふには「此子は予の正しき胤には相違なけれど、



家督を相續すべき男子である以上は、切めて生母が武士以上の娘であつたならば、何も苦慮する事はなけれど、泉州堺の一商人の娘風情を、此六十四萬石の大守を産んだ母君と爲すのは、實に耻かしい事である」と考へた、併し此愛妾は堺の商人の娘と云ふのは偽りで、其實京都に於て當時飛ぶ鳥落す程の勢力ある、櫛毛大納言と云ふ公卿の息女であつたのだ、が、家の經濟が不如意であつた爲め、堺の商人の娘として大名の邸宅へ奉公をさせて、娘の仕送りを受けて家計の補ひにして居たのだ、ところが愈々若君誕生と聞いて、櫛毛大納言は「斯くなる上は最早や隠して置くにも及ぶまい」と考へて、或日其娘の許へ「好き折を見て櫛毛大納言の息女である」と云ふ事を

打明けよ、其方が若君の爲にも好からうと思ふし、又我れも今後相當の仕送りを爲て貰ひたいから」と云ふ意味の手紙を送つたので、之を受取つた娘の愛妾は「お父様の思召は御尤である、また忠宗公も斯くとお聞き遊ばしたら、嘸どかし一入のお喜びであらう、去りながら今日が今日まで、商人風情の娘と云ふて居たものが、急に櫛毛大納言の娘であると名乗るのは、何うも極りが悪い様な心地がする、是れヤ何う云ふ折に何う云ふ風に申上たものか」と、思案にくれてポロリと涙を溢し、其手紙を巻きつ開きつして居ると、其處へ丁度忠宗公がお渡りになつて、此有様をチラと眺められたので、愛妾はハツと驚き前後の辨へもなく、直に丸めて口へ頬張り込んだ、



すると忠宗公は不圖邪推せられて、ムラ／＼と胸に込上げて来た心は云ふまでもなく可愛さ餘つて憎さが百倍と云ふ憤怒の精神であつた、公はイキナリ短刀の鞘を拂つて眞二つに斬捨てた、アツと魂切る悲鳴と共に愛妾は三寸呼吸絶えたのであつたが、其れにしても公が心にかゝるは以前の手紙であるから、死人の口中より其れを引出して、能く延して讀んで見たれば、コはそも如何に情夫どころか、實父櫛毛大納言よりの手紙であつたから、忠宗公はアツとばかりに打驚き、「さては大納言の息女であつたか、ア、残念な事を致した」と涙ながらに死骸に取着き、「何故斯う／＼と打明けて、早く知らせて呉れなんだ、櫛毛殿の娘とあれば、此上もなき満足なるに……」

ア、不愜な事を致したわえ」と、深く其身の短慮を悔まれたが、最早や取返しは附かなんだ、我等が心の變化は斯くの如く當にも頼みにもならないものである、忽ちにして起り忽ちにして消え、或は愛し或は憎み、玉の隨所に轉々するが如きものであるから、早く其心にスワリを附けて、生々世々後悔の無い様にせねばならぬ。

其七十八 草野の二王子

人皇十七代履仲天皇の孫に市邊押磐皇子と云ふお方があつて、其皇子に二人の王男子が在した、兄王を億計と云ひ弟王を弘計と申上て居たが、父押磐皇子が、二十一代雄略天皇の爲に弑せられたに就



いて、此二王子は難を避けて播州明石に逃れ、草深き一村落の長なる細目と云ふ者に身を寄せて、暫し奴僕となつて仕へて居た、如何に浮世を忍ぶ假枕とは云へ、玉の臺の御身を以ていふせき鄙に佗住居し玉ふさへあるに、時としては野山に草を刈つたり柴を拾ふたり、さては田畠の耕作から牛馬の使役まで、なにくれとなく爲玉ふ事の悲しさよ、人なき影に破れし御袖を絞らせ玉ふ事も多かつた、斯くて年月重ねるところに、或日都よりの巡視とあつて某官吏が此家に宿泊したので、細目は盛大なる酒宴を設けて饗應した、此時弟の弘計王は私かに兄億計王に向つて、「モシ兄上！我等雲井に近き身を以て、年久しくも賤が伏屋に佗住みしこと、思へば口惜しき限では

ありませんか、幸ひ今日は都の巡視が来たことゆゑ、今夜酒宴の席上にて實を明かし、大に名を顯はし身を立てやうではありませんか」と云ふと、兄王は「开は至極宜しけれど、却て禍を招きはせぬか」との玉へば、「兄王の仰せ、御尤千萬なれど、我等皇系の身を草野の間に埋めて、賤しき土民に使役せらるゝよりも、寧ろ其名を顯はして禍に死するが本意で御座る」と、涙ながらに兄弟が、相抱いて泣き玉ふ痛ましさを、餘所に見る目も哀れであつた、兄王やうく涙を拂ひ「兎も角も其方の意見に従はう」「ナニお許し下さいませるか」「如何にも其方に一任しやう、したが、實に兄弟浮沈の一大事なれば、必ず共に油断めさるな」其儀は重々心得ましたれど、かゝる大



事は兄王が……「イヤ其方に任す、好きに計らへよ」として、弟王に譲られたゆゑ、弘計王も快く引受け玉ふた、やがて酒宴の席になると、細目は二王をして盃膳の間に侍らしめた、酒宴酣にして一座大に興を覚えしころ、彼の巡視は二王に向つて「何か一曲、舞ふては呉る、まいか」と所望した、二王は豫て覺悟の事ゆゑ、兄王先づ起て舞ひ、弟王も亦續いて舞ひ玉ふた、而して先きに作り置いたる歌を、聲高らかに謠ふて、其中に我等は下賤の者ではなく、雲井に近き貴き身なる由を顯はし玉ふた、で、一座大に驚き、速に二王を高座に据ゑ奉つて、一同席を下つて再拜し、今が今まで斯くとも知らずに居た罪を謝した、而して早速宮殿を新築して二王に奉り、又

急使を都に走せて此事を報じた、當時雄略天皇は已に崩じられて、二十二代清寧天皇の御代であつたが、天皇は皇子なく御代を譲り玉ふべき御方が無いので、何れよりか皇系の人々を探り求めて、皇嗣となさんとして「八方搜索に餘念なかりし折柄であつた故、清寧天皇は此二王の世に在しき由を聞召され、非常なる御喜びにて「天朕を憐んで此二王子を恵まれたのぢや」と仰せられ、早速群臣と議して二王を都へ向へさせられ、兄億計王を立て、皇太子となし、弟弘計王を皇子と定められた、永の年月民間に下つて、賤しき鄙に起伏し、玉ふたも、昨日の夢と過ぎし嬉しさに、二王子も覺えず錦の御袖を霑はされたが、間もなく清寧天皇は崩御あらせられたので、皇太子



なる億計王が速に位に即かせらるべきであるのを、皇子の弘計王に譲り玉ふたが、皇子も御承知なくして遂に久しき間、帝位は空しく打過ぎて、政を聽く人もなきゆゑ、止むなく飯豊青皇女が簾を垂れて假りに政事を聽かせられたが、皇女も幾許もなく薨じさせ玉ふたから、群臣朝に集つて大評定を行つた、其時皇太子億計王は皇子弘計王に玉璽を奉り、自身は席を下つて臣の禮を取り、恭しく「帝王は最高最貴なる重位であれば、宜しく大功あるものが即くべきである、我等が今日の榮を爲したのは皆皇子の功であれば、速に之を受け玉へ」と仰せらるゝと、皇子弘計王辭し玉ひて「先帝兄王を以て皇太子と定めらるゝ、いかに我之を受くべきや、且つ弟として兄

上の爲に計るは道の當然であつて、決して功の誇るべきは御座らぬ」とわれは、皇太子猶も譲り玉ひて「先帝の我を皇儲と定め玉ふたのは其年長の故を以てである、去りながら功なくして功あるもの、上に立つは、我が忍びざる所であるのみならず、天の禍は必ず之れより生ずるであらうと思ふ、殊に天位は一日も空しくすべきにあらねば、速に位に即いて民心を安んじさせ玉へ」と、一言一句眞實を籠めて勧め玉ふたので、皇子も遂に辭する言葉なく、涙ながらに億計王の請を容れさせられた、之を二十三代の顯宗天皇と申奉るのである、が、在位僅かに三年にして、天皇は不幸遂に崩御あらせ玉ふたので、兄の億計王が即位し玉ふた、之を仁賢天皇と申上たので



四四二  
ある、二帝共に能く民情に通じさせ玉ふ事であるから、政を治め玉ふに當つて、飽くまで臣民を勞はり慈仁を加へさせた事故、民皆悦服して子の親に歸するが如くであつた。

### 其七十九 喧嘩押への御符

松平伊豆守信綱公は世に智慧伊豆と呼ばれて、徳川時代の唯一の智者であつたが、或時其召使の小坊主で年齢十五六ばかりの某と云ふが、大層鬱ぎ込んで心配をして居る様子に、信綱公は不審を起された、此小坊主はいと愛らしい上に天性氣輕な質であつたから、公も殊の外寵愛せられて居たのであつた「其方の氣輕者に似合はぬ、何

を鬱ぎ込んで居る？」問はれた小坊主は、ハツと驚いて「是れはお殿様……」とは申したが、暫し躊躇して言葉が続かないので、公は「如何致した、氣分でも悪いのか」との仰せ、今は餘儀なく小坊主も「イヤ、御目に觸れまして恐入ります、實は親の恥を御前に晒すは心苦しう御座いますが、何を隠くしませう私の兩親は、如何なる宿縁か至つて夫婦仲が悪く、三日に揚げざる喧嘩沙汰、其れも口先ばかりの争ひでなく、打つたり蹴つたりの無法三昧、其れはく始末に行かぬ亂暴を働きますから、私も實に途方に暮れて居ります、今朝も今朝として曉方から、始めましたのを見捨て、参りましたが、何うしたら彼の喧嘩が罷むだらうと、其ればかりを苦に致します」と申上げ



た、すると、信綱公は、「ニコニコ」と笑はれ「さうか其れヤ氣の毒ぢや、  
 が、心配するには及ばぬ、予が其方に喧嘩押への好き御符を遣はす  
 から、此後兩親が始めたら、早速喧嘩の中へ割つて這入り、二人の  
 顔を御符で撫でるが好い、一生懸命に撫でさへすれば、喧嘩は忽ち  
 治る請合ぢや」とあつて、紙に包んだ重い御符を下された、小坊主  
 は大に喜んで始終其れを懐中し、「もう始めさうなものだ」と今度は  
 喧嘩を待つと云ふ始末、其んな時になると中々始まらない、ヤア始ま  
 つたぞと思つても、直に消えて仕舞う、ところが二三日経つと果し  
 て始まつた、今度こそはと小坊主は、イキナリ大立廻りの中へ飛込  
 んで、懐ろから御符を取出すが否や、一生懸命になつて兩親の顔を

撫で廻はした、撫で廻はすのか小突のか分らない、が兎に角忤が妙  
 な事をするので、二人は喧嘩の威勢も抜けて「何をするのか」と云  
 ふと、小坊主は涙ながらに殿様から喧嘩押への御符を頂いた事を話  
 した、で、夫婦の者も殿のお耳に入れたのを深く恐縮したが「其れ  
 にしても喧嘩押への御符とは何なものであらう、今まで聞いた事も  
 見た事も無いが、一つ開けて見やう」と、幾重にも包んである紙を  
 披くと、中には小判が一枚入れてあつた、二人は顔を見合せてニツ  
 コリ笑つたまゝ、喧嘩は何處へやら消えて失くなつたと云ふ。

其八十 風流なる夫婦



「ふだん着で、来て媒妁人を、驚かせ」と云ふ川柳の句があるが、世には随分夫婦喧嘩も絶えぬものと見ゆる、併し中には頗る風流なものもあつて、其れが爲に遂に仲直りをする事もある。

豊後國の士で某と云ふ人の妻は夫婦の仲に子まで爲しながら、兎角日頃仲が悪くて、或時遂に良夫に離縁れて家を出やうとした時、なくなく「すれぐの中在花咲く木賊かな」と咏えだれば、一念子の事に思ひ及んだものか、良夫の心は忽ち解けて再び妻を呼び入れ、以後夫婦睦じく暮したと云ふ。

又或女が良夫に離縁れて家を出づる時、俄に雨が降り出したので、良夫も氣の毒に思ふてか「傘を持って行け」と云ふたれば、妻振り返つ

て「降らばふれ、降らば降らば降らずとて、とてもかわける袖ならばこそ」と咏んだので、良夫の心も忽ち和いで、首尾克く元の鞘に收つたと云ふ。

又或所の鼻の缺けたる男は、媒妁人に欺かれて、髪が無い臺灣坊主の女と結婚した、其處で男は不平氣に「三輪の山杉の木立と聞きつれど、神(髪)のなきこそ淋しかりけれ」と咏んだ、ところが嫁も中中さるものと見え、「吉野山木々の梢は春なれど、花(鼻)のなきこそ淋しかりけれ」と咏つた、すると媒妁人も黙つては居られず、取敢へず「世の中に貧乏人も多けれど、ふたりが中には鼻紙(鼻、髪)もなし」と咏んだので、遂に三人共に大笑ひとなつて丸く收まつたと

風流なる夫婦



云ふ。

これは又風流と云ふ譯でも無いが、變つた夫婦の話がある、所は米國とか云ふ事だが、十八年前に些細な事から夫婦喧嘩を始め、終には出るの入るのと騒いだ揚句、妻は「何でも別居する」と云ひ出すと良夫は「我々は子供を教育する義務がある、忤の教育を終るまでは親の義務として、勝手に別居するなどと云ふ事は出来ない」と主張した、其れでは忤の教育を終るまで待たう」と妻も同意して、其れより十八年と云ふ永の年月、同じ家に棲んで居ながら、息子には雙方が口を利ても、直接には互に言葉を交さない、かくて十八年目に息子が或學校を卒業した時、始めて約束通り別居したと言ふことであ

る。

其八十一

薩摩守忠度の詠歌

平家一門六波羅の館に榮華の春を謳ふたのも、昨日の夢と醒め果てて、源義朝の嫡男頼朝が頭を擡げし時は、あはれ平氏は凋落の悲しき秋に立返つたのであつた、治承四年の石橋山の旗擡げを第一として、數度の合戦に源氏は武運芽出たく勢を得しにも拘はらず、平家は俱利伽羅峠の一戦に大敗して、今は戦ふべき勇氣も出でず、一ト先づ都を立退いて西國に落ちねばならぬ悲運に陥つた、平相國清盛が弟なる薩摩守忠度は、今更ながら味方の腑甲斐なきを歎じつゝ、



涙ながらに「古郷を焼野の原にかへりみて、末も烟の波路をぞ行く」と咏み捨て、淀の川尻まで下つた事であるが、急に郎等六騎を具して忍で都へ立返り、夜半に五條三位俊成卿の館を訪れた、今しも門に立つてホト／＼と戸を叩いたけれども、何の音沙汰も聞こえない、内では之を知つて居たれど、かゝる亂世の事ではあり、且夜半の事ゆゑ態と開かなんだのである、然るに餘り強く叩くゆゑ良久しくあつて青侍を出し、戸を開いて聞かした、すると「拙者は忠度と申す者で御座るが、俊成卿に見参の上、少々お願い申度儀が御座つて、態々推参仕りました」との事であつたから、五條三位は大庭に下りて、世に恐れて内へは入れなんだが、門を細目に開けて

對面せられた、忠度涙ながらに「かゝる身として推参仕るは、憚り多くは御座りますれど、豫て御承知の如く、京都の騒ぎ國々の亂れ、所詮一門榮華盡きて、都に安堵する事もなりませねば、是より西海へ落ち行く所存、今に亡びん事は疑ひ御座らぬ、就ましては、世靜つて後、定めて歌集勅撰の御沙汰もありませうから、其時こそは憚りながら、これなる巻物の中に、然るべき歌も御座りましたらば、唯だ一首なりともお加へ下さらば、假令此身は八重の潮路に沈むとも、藻鹽草書置く末の言の葉の、後の世迄も朽ちぬ嬉しさ、淀の川尻狐川より、態々忍んで上洛致しました」として、鎧の引合せより一卷の巻物を取り出して「これは年頃讀み集めた舊詠どもに御座



りなすが、此身と共に海の藻屑と爲すは残念ゆゑ、砌下に進らせ申す次第、何卒勅撰の時には思し出され下さるやう」と差出した、五條三位は感涙を流して請取り「御詠一卷慥にお預り申た、是れぞ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南と致しませう、さるにても斯る騒劇の中に、昔を忘れ玉はずして御音信に預る段、俊成恐悦至極に存じます、たとひ憂世を萬里の浪に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、勅撰の時は必ず思出すで御座る」と仰せられたので、忠度大に安心し「今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも、思ひ置くこと更になし」として、俊成卿に別れを告げ、ヒラリ馬に跨つて「前途程遠し、思ひを雁山の暮雲に馳す、後會期無し、櫻を鴻臚の曉涙

に霑ほす」と、古詩を口吟しつゝ、甲の緒をしめて、西を指して落ち行いたのであつたが、之を見送つたる俊成卿は、忠度が古詩の本文に「後會期遙か」とあるを、復たと逢ふべき別れならねば、特に「後會期無し」と咏じたる心根を、一入哀れに感じられて「ア、世が世なりせば、此人こそ世の尊敬の的となつて、歡樂心のまゝになりゆくものを、かはる浮世の習ひとて、門を隔つる悲しさつらさ……」と、覺えず袖を絞られたのであつたが、果して世静つて後、千載集を選ばるゝに當つて、忠度が志しを思ひ合されて「故郷の花」と云ふ題で「讀人知らず」として一首入れられた、其歌は「さゝなみや志賀の都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな」と云ふのであつた、俊成

＊。薩摩守忠度の詠歌



卿の心では忠度と云ふ名字をも顯はし、又外に澤山加へたき歌もあつたれど、何しろ朝敵となつた人の事であるから、世を憚つて唯一首だけ入れられたのであるが、併し忠度の亡魂は如何に嬉しく感じたであらうか。

今之を昔語りと思ふて仕舞へば、何の事は無けれど、併し西海に死に行く道の忠度が、態々狐川より引返へして、これだけの事を頼み置くと云ふ心根が、如何にも優しくもあれば哀れにも思はるゝのである、今吾等お互も何つ死すべき時期が到来するか知らねど、イザと云ふ場合になつて、未來永劫までの形見として、世に残すべきもの、支度が出来て居るか、各自に能く、反省して見ねばならぬ。

### 其八十二 一休和尚の蟲干

一休禪師は後小松帝の藁子で、初めの名を周覺と云ひ後宗純と改めた、一休は其字である、幼より出家し苦學修行の結果遂に大徳寺四十七世の住僧となつた、禪師の逸話は汗牛充棟も音ならざる程であるが、或夏の事であつた、何か所用あつて比叡山に登られたが、丁度叡山では一切經の蟲干最中であつて、坂本邊の信者はこの經文を吹く風に當られるのは、生々世々の善根であるといふので、日々ゾロゾロと參詣に出掛ける、遠きは五六里の外から集つて來る信者もあると云ふ譯で、中々賑かである、今しも叡山に登り着いた一休は、



「ヤア延暦寺では藏經の蟲干だな、俺の藏經も大分汗をかいたからチト干さらうか」と云つて、經藏の側の大きな樹の影で、眞裸體になつて汗を拭き、涼しい風を受けて遂にウトウトと寐て仕舞た、此體を見た叡山の役僧で、蟲干の係をして居る一人がやつて来て、「甚だ怪しからぬ坊主だ」と囁きつゝ、側へ寄つて見ると、是れはしたり大徳寺の一休禪師だ、流石の役僧怒るわけにも行かず、靜かに搖り起して「禪師、晝寢も時と場所とに因りまする、今藏經の蟲干をして、近郷近在の者が此通り參詣に来て、隨喜の涙を灑いで居るのに、貴僧が大の字なりの大鼻息では、信仰も何も褪めて仕舞うぢやありませんか」と答めると、禪師は寐ぼけ眼を擦りつゝ、「ナニ、紙

に書いたお經を難有がつて、お賽錢を投げて行くものがあるから、俺が此處に寐て居ては悪いと云ふのか、叡山には紙に書いたお經より外には無いと見えるな、氣の毒ぢやが此一休の身體はな、飯も食へばお茶も呑むし、話もすれば法も説く、何でも出来る一切經ぢや死んだ紙の一切經と活きて働く一切經と、何方が役に立ち何方が難有なのだ、偶々數里の道を登つて来て、大事な活きたお經が汗になつたから、幸ひ木影で蟲干をやつたのが、何が不都合ぢや、何が怪しからぬのぢや」と怒鳴りつけたので、流石の役僧も膽を潰して逃げ去つたとの事である。

一休和尚の蟲干



難有がつて、身體で活きたお經を讀む事を忘れてはならぬ、去りて又此話を解毒圓呑にして、黄卷赤軸を尻拭きに用ゐる様な事があつては大變だ。

### 其八十三 般若多羅尊者の讀經

昔東印度の或國王が、宮中に於て大法會を行はるゝに就いて、當時有名な、付法藏第二十七祖の般若多羅尊者と云ふを招待した、般若多羅は誰れも御承知の、達磨大師のお師匠様である、其般若多羅尊者が、兎も角も一國の國王の請を受けて、宮中にお越しになつたと云ふのであるから、勿論多くの隨身もお連れなされたであらうし、

又各地より招かれた名僧知識も澤山居られたであらう、然るに尊者は御馳走は遠慮なしに食べらるゝけれど、一向にお經を讀まない、外の人達にはばかり讀まして置いて、御自身は平氣の平左である、其處で國王も喰ひ逃げをきめられては殘念だと思つたか、「和尚何を看經せざる」と催促に及んだ、すると尊者は拔らぬ顔をして「貧道入息陰界に居せず、出息衆縁に涉らず、常に如是經を轉ずること、百千萬億卷」と仰せられた、其意味は、貧道とは道に貧しい者と云ふ事で、尊者が自身の事を謙遜された言葉である、即ち私と見れば好い、入息は吸ひ込む息、陰界は色受想行識の五陰と、眼耳鼻舌身意と色聲香味觸法の六根六境と、而して其六根六境六識なる十八界

般若多羅尊者の讀經



とを一括して、茲に陰界と云ふたもので、承陽大師の所謂「心意識の運轉」や「念想觀の識量」なる妄想を指すのである、第二句の出息は云ふまでも無い吐く息、衆縁は五欲六塵の一切境のこと、第三、第四の句は能く判つて居る、其處で此大意を云ふて見ると、私は出息入息共に轉倒妄想を離れて、常に觀自在の三昧に住して居るから、他の坊さんのやうに一口御馳走になつては、一卷お經を讀み、一文御布施を頂いては又お經を讀むと云ふ様な、其んな仕拂ひ勘定の眞似をせずとも、從晝至夜、明けても暮れても活きたお經を身體で讀んで居るから宜しいのだ、而も其お經の數は何百何千何萬何億と、兎ても算盤などで勘定の出来るやうな少數ではなく、其又讀經の聲

も功德も、三千大千世界に響き渡り充ち渡つて居る事であるが、國王には其れがお判りにはなりませぬのか」との意味である、流石の一言に國王も二の句が出なかつたが、併し其意味は全く判つたのかどうか保證の限りで無い。

前の一休禪師の身體の蟲干と云ひ、此尊者の讀經と云ひ、眞面目に實參實究せねば、飛んだ誤りに陥る事である。

### 第八十四

#### 光明皇后の發願

光明皇后は藤原淡海公の第二女に在まして、其容貌の秀麗なること例ふるに物なく、宛ら光明の輝くが如くであつた、其れゆゑ光明子



と名けさせ玉ふたとの事である、人皇四十五代の聖武天皇が未だ皇太子にて、東宮に在せられし時召し入れて妃とし、天平元年天皇御即位の時に皇后とし玉ふたのであつた、皇后は一王子と一王女とを産み玉ふたが、皇子は早く薨じさせ、皇女御一人になり玉ふた、此皇女が後に四十六代の帝位を嗣せられて、孝謙天皇と申した御方である、光明皇后は若く在しましたる御時から、厚く佛敎を尊ばれて、御母君なる橘の弟媛の爲に興福寺の西金堂を建て、釋尊十大弟子の像を安置し玉ふたが、彼の有名なる奈良の東大寺や、諸國の國分寺なども皆皇后の御勸めに因つて、聖武天皇が御建立あらせられたのである、然るに皇后は尙も飽足らで、悲田院施藥院と云ふ二

種の慈善事業を興され、天下の貧民にして飢渴に苦めらるる者や、病魔に襲はれても頼む木蔭の無い者を收容して、之れに食物と薬とを與へて安穩を得しめた、斯様な大御心であつたから朝廷の政事は端に行はれ、四海の民は皆其御恵に浴するを得て、國內は宛ら極樂淨土の光景を呈したのであつた、所が、ある時空中に五色の雲が棚引き、其中からあたり眩ゆき光明が輝やいて、而も微妙の音聲にて「皇后もろくの善根多しとは云へ、決してこれに慢心を起させ玉ふた、浴室淨濯の功德は更に廣大である」と響いたのを、現在耳に爲玉ふた皇后は、いと怪しみつゝも大に喜び玉ふて、早速浴室を設けられて貴賤上下に入浴せしめられ、加之、皇后躬親ら玉の御手を

光明皇后の發願



伸べさせて、一千人の垢を流さんと誓はせられた、何と恐入つたる御誓願ではあるまいか、かくて九百九十九人まで御願を果たされたが、最後に一人の癩病患者が來た、總身五體は瘡と膿とを以て満たされ、其臭穢なる事は實に夥しい、流石の皇后も手の附けやうなく「如何にして搔流さんや」と仰せられたれば、患者は無遠慮にも「陛下の御大願は貴賤を選ばせ玉はぬのであれば、我等とてもいかに其數に漏れんや」と申上たので、皇后も其言に屈して垢を流し玉ふたが、患者重ねて申すには「我等はかゝる業病に罹つて、多年醫師の治療を受けましたが、一向に其效驗が見えませんが、醫師は人を雇ふて膿を吸はせたらば、必ず治癒するに相違ないと申すが、假

令千萬金を出しましたとて、何で其様な慈善者が御座いませう、然るに今陛下は無遮の大悲を起して、普く衆人を哀愍し玉ふ事であれば、何卒我が膿を吸ふて此苦痛を救ひ玉はれ、然なくば眞の大慈悲とは名けられ申さぬ」との事に、皇后も餘儀なく膿を吸ひ瘡を洗ひ終つて「我れかく忍び難きを能く忍ぶも、畢竟汝を憐れむが爲なれば、必ず人にかくと告げな」と、患者に宣はせらるゝと、不思議や患者は即座に大光明を放つて「皇后必ず阿闍如來の垢を搔きたり」と人に告げ玉ふな」とて、直に紫磨黄金の佛體と變じ、虚空を指して飛去り玉ふた、此體を見そなはしたる皇后は、且驚み且喜び「嗚呼我が大願成就せり」と宣ふて、やがて其地に一字を建立し、



阿闍寺と名けられたのであつた、かくて皇后は御年六十歳を一期として、寶字四年六月に崩じさせ玉ふたが、實に皇后の如きは活ける佛菩薩に渡らせらるゝのである。

### 其八十八 益者三友

古詩に「友を求むるは須らく己に勝るべし、我に似たるは無きに如ず、羅葛喬木に倚り、遂に百尺の枝に上る」とあるが、如何にも人は其友の如何に依つて、善人ともなり悪人ともなる事があるから、古來其友を選択するに就ての種々の教訓があるのである、承陽大師が「僧は勝友なるが故に歸依す」と示されたのも、また友人選擇の道

益者三友

を明されたと見る事も出来る、孔子も益者三友損者三友と云ふ事を説かれて「直きを友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり、便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり（論語）」と仰せられた、其益者三友に就いて南條博士の一つ話がある。彼の日本外史を著はした頼山陽は、其五卷目に楠氏の傳を記されたが、此處は山陽も餘程心を用ゐたものと見えて、其時分眞宗大谷派の學頭として名高かつた、易行院法海と云ふ講師の所へ、豫て懇意にして居た雲華院大舎と云ふ人に連れられて參つて、其楠氏の傳を見せて評を下して呉れと頼んだ、其時法海は机に倚つて讀書して居たが、開口一番山陽を見返つて「此頃聞く所に依れば、藝儒久太郎な



るもの京都に来て酒を呑むこと三年、未だ母に歸省する事を知らずして、忠臣楠氏の傳を書いたと云ふが、其れがお前の事か」と尋ねた、山陽も驚いたが仕方が無いから「左様で御座います」と返事した、すると法海は「凡そ忠臣を求むるには孝子の家に於てす、今此の不孝人を以て彼の忠臣楠氏を傳す、楠氏にして若し靈あらば必ず悲み給はん、我も亦此の不孝人を見るを好まぬ」と云ふて、復た書物を讀み始めた、是れ即ち直さ者で無ければ云ふ事の出来ぬ言葉で、大概の人ならば「イヤ何うも結構！」位でお茶を濁す所である、然るに法海は頭から叱り付けたのであつた、で、山陽も大に汗向背して次の間に下つて、連れられて行つた大舎に向つて「流石は一宗の學頭ぢ

や」と云つて、大に敬服したと云ふ事である、是れは山陽が直さを友としたお蔭である、其處で大舎は山陽に向つて「貴方は王陽明を學んで、知行合一と云ふ事を常に口にせらるゝが、其知行合一と云ふは此處の事で、知と行とは何時も一致しなければならぬ、知つて居ながら行はなかつたならば、眞實知つて居るとは許されない、今貴方も初對面の老僧に叱り付けられて、嗚呼悪かつたと氣が附けばこそ、斯く敬服されたのぢやから、知行を合一させるには最も好い機會では無いか」と勧めた、是れ實に諒ある者の口よりで無ければ出ぬ言葉だ、其處で山陽も固より多聞の人であるから、直ちに春秋左氏傳の典據に依つて「私を叱つて下さつた法海老師が、夏の太陽



であるならば、御親切に導いて下さる貴僧は、冬の太陽のやうなもの  
 である」と云ふた、これは左傳に「夏日は恐るべく、冬日は愛すべ  
 し」とある故事を擧げたのである、是れで益者三友が揃つた譯であ  
 るが、我等もかゝる益友を求めるのが何より肝要である、かくて山  
 陽は其翌朝早天に京都を出發して、七十里の遠方に在る母を省みた  
 と云ふ事である。

### 其八十六 怪物と狂人

お互の理想とし目的とする所が安心の二字にある事は、今更云ふま  
 でも無い、而して其安心とは各自の精神が寂然不動の位置に落着い

て、決して物の爲に迷動せざる状態を指したものである、然るに其  
 安心を妨ぐる煩惱の一に「疑」と云ふ悪い作用がある、宗教に於ては  
 疑ひほど悪いものは無い、疑ひは疑ひを重ねて迷ひを生じ、迷ひは  
 迷ひを重ねて遂に信心を攪亂して、生々世々立命の地に安住する事  
 が出来なくなるのである、圓光大師の一枚起請文にも「唯往生ぞく  
 らくのためには南無阿彌陀佛と申して、うたがひなく往生するぞと  
 おもひとりて申す外には別のしさい候はず」とあり、又「此ほかお  
 くふかき事を存せば、二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候べし」  
 とある。

或旅人が山路を通行して山中に日を暮らし、心細氣に道を急いで居

怪物と狂人



ると、シヨボくと雨さへ降出したので、ますます怖気が附て「斯う云ふシヨボく雨の山路へは、能く怪物が出る」と聞いて居るが、何うか今夜は出て呉れねば好いが」と、心の中で祈りつゝ急いで居ると、横路から大の男がヌツと出て来た、「ヒヤア出くさつたぞ、出くさつたぞ、愈々大入道と来やがつた」と思ひながら、慄ひく歩いて居ると、其大男が「何處までお越しになります、御一處に願ひませう」と云ふ「馬鹿云へ、怪物なんぞに一處に願はれて堪るものか」と思つたが、然あらぬ體に「難有う御座いますが、私は大層疲れましたから、チト此邊で休んで行きますから、何うぞお先さへ：」と云つて、松の根方に腰を掛けると「ア然うですか、其れや幸

ひだ、私もまだ辨當を遣はないんですから、御一處に休んで喰べると爲ませう」と云ひつゝ、側へ腰掛けた、而して竹の皮包を開いて「貴方も一つ如何ですか」と差出した、見れば油揚鮓が澤山這入つて居る「此畜生！何處から浚つて来やがつた」と心の中でつぶやきつゝ、「イヤ難有う、私はチト瘴氣で油物は一向に喰べません」と断つて、思出したやうに「大分休まつた、お先へ失敬します」と立上ると「チヤ私も：」と鮓を頬張りつゝ飛上つた「エ、忌々しい奴に尾けられた」と氣味悪く先に立つて行くと、怪物も執拗く尾いて来る、旅人も今は我慢が成り難く、燒糞半分に「貴方は鼠の天麩羅は好きですか」と問ふた、大男も藪から棒の質問に驚いたが「何をお仰い



ます、鼠の天麩羅なんて、そんな物は喰べたことはありませんよ」  
 「ない！ハテ變だ、狐が鼠の天麩羅を知らない筈は無いか」と、心  
 の中で不審りつゝ、今度は「稻荷様の鳥居は飛び憎いでせうな」と出  
 抜けに聞く「イヤ何うも貴方は面白い事ばかりお仰る、今とは違つ  
 て私共の學校へ行く頃は、器械體操なんて云ふものは無し、鳥居な  
 ンぞ飛越えるやうな稽古は爲た事がありませんし、テ、ンで又稻荷様  
 なンぞ參詣した事もありませんよ」「ナニ稻荷様へ參詣した事も無  
 い……ハ、ア此奴はまだ官をせぬ野狐だな、正一位ぢや無いんだな」  
 と思つて、「何うでせう住居をするには藪が好いでせうか、谷のやう  
 な所が好いでせうか」大男は「妙な事ばかり聞く奴だ」と思ひながら

も、道中の徒然に「左様さ、私の住居は濱邊ですが、藪も筈でも出  
 る時分には好からうが、夏は蚊で困りませう」と云ふと、旅人はま  
 た「貴方は犬はお嫌ひでせうな」と聞く「イヤ犬は大好きです、私の  
 内には五六匹飼つてあります」「ナニ五六匹！何うも變だ、狐が犬  
 を怖がらぬ筈は無いか、成程、此奴化の皮が現はれると思つて、白  
 ばくれてけつかるんだ」と一人合點して、語らぬ押問答をしながら、  
 後になり先になりして、一里餘りの道を行くと、一軒の掛茶屋があ  
 つて其處には大きな無垢犬が居る、是れ幸ひと旅人は「何うです、  
 チト休んで行かうぢやありませんか」と云ふと「結構ですなア」と贊  
 成した、其處で二人一處に庭へ這入つて腰掛けだが、狐のお化は一



向に犬を怖がらぬのみか、足で犬の背中を弄つて居るので、旅人も大に不審を起して遂に聞いて見た、「モシ貴方は狐のお化ぢや無いンですか」「冗談お仰つちやア困ります、私は其んな狐なんぞぢやありません、立派な人間ですよ、シタが貴方は狂人ぢや無いンですか」

「何をお仰います、私は狂人どころぢやありません、正氣な眞人間ですよ」「へ、エー、然うですか私はまた最前から狂人だとばかり思つて居ました」「私はまた貴方をお化だとはばかり思つて居ました」と云つて、互に大笑ひをしたと云ふ話があるが、其れ御覽なさい、最初一念疑を起したばかりで、疑は疑を産み、迷は迷を重ねて、立派な萬物の靈長でありながら、互に狂人だの畜生だのと思ひ合つて、

長の道中片時も安心が出来なかつたのである。

### 其八十七 同事行の功德

昔常陸の江戸崎と云ふ處に鍋屋某と云ふ者があつたが、其妻某は至て姑と仲悪しく、俗に云ふ犬と猿との様であつたゆゑ、亭主も大いに心配して色々融和の道を講じたが仲々甘く行かない、或時一計を案じて妻に「俺もつくづく考へて見たが、何うも母に無理が多いやうだ、老人と云ふ者は實に愚癡で頑固で困る、實は俺も殆ど母に愛想が盡きたのだ、就てはお前に極内密の相談ぢやが、何うかお前二十日許りの間、出来るだけ母を大事にかけて孝行して呉れぬか、



然うしたら俺が時機を見て、夜母を裏の池へ誘き出し、ドンと突落して殺して仕舞う、ところが世間の人々は、お前が必死になつて孝行をしたので、流石の鬼婆も後悔して、申譯の爲に身を投げて死たと吹聴するに違ひない、然すれば俺等は好い顔をして邪魔物が拂へると云ふもの、何と甘い工夫ぢやないか」と、相談を掛けた所が、女房は雀躍して喜んで「二十日位の事ならば、何んな苦しい孝行でも致しますから、其代り屹度終には殺して下さいよ」と約束をして、其れからと云ふものは心にも無い世辭を云ふたり、骨身を惜まず立働いて、只管姑に孝養を勵んだので、木石ならぬ姑も大いに感動して、次第に嫁を可愛がる所から、嫁の方でも嘘から出た孝行が終に

は實物となり、僅かの間に血を分けた母娘のやうになつた、で、良人も最早や好い時機と思ふて妻に向ひ「約束通り愈々今夜母を殺すから、用事があるなら濟して置け」と云ふと、妻は前後を忘れて「何を勿體ない事お仰います、彼の様な優しいお母さんを殺すなんて、何時良人は其んな心に……」と、狂氣の如くに叫んだ、何時其んな心も無いものだ、亭主は仕濟したりと嚴格に「是れ女房！其心を必らずとも失うなよ、我れよきに人の悪しさがあらばこそと、昔からの諺通りぢや、行末永く孝行して呉れ」とて、嬉し涙に咽んだと云ふことである。

此良人の智謀の如きが、所謂四攝法中の同事行に當るので、承陽大



師の「同事といふは不違なり、自にも不違なり他にも不違なり、譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し」と示された一例である。

### 其八十八

### 僧某の不殺生戒

昔し白河院の時、天下に殺生禁斷の令を發せられた事がある、其頃或處に一人の老母を抱へた貧僧があつたが、其老母は天性魚類が大好物で、魚が無ければ御飯が通らぬと云ふ有様であつた、さなきだに三度の食事さへも儘ならぬ貧しい僧が、偶々食物を得たからと云つても、母は魚類の無い爲に一粒の御飯も喰べぬ始末ゆゑ、日數積るにつけて老いの身の猶更力なく、さては頼み少なき哀れな運命に

陥つた、で、僧はあるにもあられずして、諸方に魚類を求めたけれども、何分殺生禁斷の頃とて何處にも魚鳥の類は皆無である、哀れなる僧は思ひあまつて、漁魚の術も知らぬ身でありながら、自ら川へ這入つて法衣の玉襷を揚げ、眞實母を思ふ一念に魚を覗つて、ハエと云ふ小さな物を二三尾捕へて、喜んで持歸へる道すがら遂に露顯して、禁制殿しい時ゆゑ直に院の御所へ引かれた、而して嚴重なる取調べを受けた「其方は天下の御法度を辨へぬ筈は無からう、況して僧侶の身として、法衣を纏ふて此禁を犯すと云ふは、何たる不都合ぢや、重罪の咎は免れぬぞよ」と申渡された時、僧は熱き涙を灑いで「如何にも恐れ入り奉ります、殺生禁斷の事も能く承知致し



て居りますが、假令其御法度が無いとて、法師の身としてあられ  
 も無い、何で斯る非法が出来ませう、去りながら、私には一人の老  
 母が御座いますが、生い先き短い身を以て頼りとするは私一人、し  
 たが、其私を見る影も無い貧僧の事ゆゑ、心のまゝに母を養ふ事  
 が出来ませず、加之母は齢老い身衰へて、三度の食事も中々容易く  
 進みませぬが、取分け魚類が大好物で、之が無ければ箸をも取ら  
 ぬと云ふ始末、去りとして殺生禁制の今日、何處へ参つて求めん術も  
 なく、其れゆゑ母は次第に衰へ、明日をも知れぬ悲しさに、切端詰  
 つて斯くの有様、重き刑に處せらるゝは覺悟の前で御座りますが、  
 一旦捕へた此魚を、再び川へ放つた所が、決して生きる事では御座

いませんから、何卒此魚を母の許へ遣はし、今一度鮮かな味を薦め  
 て、喜ぶ顔を見て来るまで、刑を御猶豫願ひます」と述べたので、  
 聞く人涙を流さぬは無つたが、院も此事聞召して、孝心深きに感じ  
 させられ、其罪を免させ玉ふた許りでなく、數多の物品を馬車に積  
 んで與へ「缺乏したらば復た申出よ」との、厚き御錠を蒙つたと云ふ  
 事である。(古今著聞集)

此等の如きも一旦不殺生戒を犯したやうなれど、決して破戒の罪を  
 構成しては居らぬと思ふ。

其八十九

念彼觀音力



昔山城の久世郡に農家の一少女があつて、疾くより深く観音を信仰して居たが、元來慈悲深くして物の哀れを餘所に見る事の出来ない性質であつたから、或時の如き、人が蟹を捕て殺さんとするを見て、愛憐の情に堪え難くて速かに金を與へ之を買ひ取り、直に池に放つて危難を遁れしめたのであつた、其後少女の父が田畑の耕作に出た時、一匹の蛇が蛙を呑みつゝあるを認め、打ち放さうとしたが、蛇は中々放さないで「是れ蛇よ、蛙を放せ、然うしたら貴様を俺の聲にしてやるから」と云ふと、其蛇は嬉しげに農夫の顔をつくく眺めて、呑みかけた蛙を吐出して藪の中へ這入つて仕舞つた、で、農夫も不思議に感じて「つまらぬ事を云つて退けた」と後悔し

たが、今更取返しも附かぬゆゑ其儘歸宅した、而して「今夜變つた椿事でも起らねば好いが」と心配して居ると、間もなく五位の姿に身を窶した立派な男が来て、「今日の御約束通り伺ひました」と挨拶したので、「サア大變だ」と農夫も驚き、愈々恐れ惑ふたが、何と返事の爲やうもないから、「チト都合もあれば、兩三日経つて後にして貰ひたい」と斷つたれば、否やも云はずに歸つたが、少女は此事を聞いて怖れ悲しみ、固く寢所を閉ぢ籠めて隠れて居ると、果して兩三日の後にやつて來た此度は元の姿の蛇となつて、見るも忌はしい形相をして居る、ところが其蛇は少女の隠れ場を知つて居て、寢所の邊りを這廻りながら、尾でバタ／＼と戸を叩いて居る、少女は怖



ろしさ諭えんに物なく、一心不亂に觀音經を讀誦した、すると夜半頃に澤山な蟹が集つて来て、この蛇を散々に剪切つて、其儘姿を隠して仕舞つた、少女は尙も一心を籠めて、通夜此お經を讀んで居ると、御丈一尺ばかりの觀音薩埵が現はれ、微妙の音聲にて「汝恐るゝことなかれ」と慰め玉ひて、搔消す如くに消え失せたと云ふ事である。(古今著聞集)

是れ偏へに少女が信力に依つて、觀音薩埵の冥助を蒙つたと云ふものである、觀音經に「若し惡獸に圍繞せられ、利き牙爪怖るべきも、念ずる彼の觀音の力、疾く無邊の方に走らん、蛇及び蝮蠍の氣毒、焰火の如くに燃ゆるも、念ずる彼の觀音の力、聲に尋いで自ら回り

去らん」とあるも、皆此處の事である。

### 其九十 虱と蛇の念力

昔或田舎人が京へ上つて、旅宿の椽側で日和暖りをして居ると、頻りに首の廻りが痒くなつて来たから、手で搜り廻すと、大きな虱が一匹捕つた、「己れ憎い奴だ」と田舎人は、止せば好いのに小刀で柱を少しえぐつて、其中へ虱をへしこめて埋めて置いた、而して田舎へ歸つて仕舞つたが、翌年また上京して同じ旅宿へ泊つたから、不圖去年の虱を思出して、「何うなつたか」と柱を改めて見ると、肉も血も已に亡くなつて居るが、皮ばかりはチャンとして残つて居る



ので、「ナンボ何でもモウ死で居るだらう」と引出して見たところが驚くべし手足が少し動く、田舎人は不思議に思つて、試みに脰へ乗せて見たところが、其處ら邊りを動き廻つて遂に喰ひついた、間もなく痒さを覺えたけれど、生命冥加な風であるから、チツと辛抱して見て居ると、段々血を吸つて眞赤になり、大きな腹になつたから拂ひ落したのが、其風の喰つた跡が痒くて〜仕方が無い、止むを得ず思ふまゝに痒いて居ると、やがて痛さを感じると共に腫れ上つて、幾許もなく大層な瘡になつた、で、百方治療に手を盡したけれど其効なく、遂に其れが爲に可惜生命を取られたと云ふ。(古今著聞集)

又建保年間の事だと云ふが、京都は北小路堀川邊に住む或女が、釜

の前で火をたきつゝ湯を湧して居たところが、三尺ばかりの蛇が這つて来て、竈の前の鼠の穴へ這入つて仕舞つたので、女も驚いて如何はせんと案じ居る所へ、隣家の一女が來合せたから事の仔細を話すとその女が、「ナンニ恐しい事があるモンですか、其湧立たお湯を穴の中へ注込んでお遣りなさい」と、無雜作な事を云ふので、つひ前の女も其氣になつて、「コト〜養立つて居るのを注込んだ、すると案の條蛇は苦しがつて這出した、而してのたうち廻つて死で仕舞つた、其翌日のこと、養湯を注した女が俄に發病して、「熱い〜」と叫んで藻掻く態の不思議さに、驗者を呼で祈禱をして貰つた所が、蛇の亡靈が現はれて「いかに祈るとも叶ふまじ、われ大路にて小童にさ



いなされ、已に一命危き所を、僅かに身を以て免れ、暫し苦痛を休めんものと、穴に這入れば又もや熱湯を注がれ、遂に生命を失ふたも、もとはと云へば其方ゆゑ、今こそ思ひ知りおれヤ」と、怨みの數々を述べ立て、とうとう取殺したと云ふ事だが、丁度其刻限も前日蛇が死だ時刻であつたと云ふ。(同上)

假令我等に害を加ふる小蟲畜類と雖も、決して慘酷な取扱はせぬものである、梵網經には「若佛子若くは自ら殺し、人を教へて殺さしめ、方便して殺し、殺すを讚嘆し、作すを見て隨喜し、乃至咒して殺さん、殺の因、殺の縁、殺の法、殺の業あらん、乃至一切有命の者、故に殺すことを得ざれ、是れ菩薩は應に常住の慈悲心孝順心

を起して、方便して一切衆生を救護すべし、而るを反つて自ら恣なる心、快き意を以て殺生するは、是れ菩薩の波羅夷罪なり」と戒められてある。

其九十一 滑稽慾の間違

或所に慾張つた宿屋の親爺があつた、今日此頃の不景氣に猶更當惑して、好い鳥もがなと店に頑張つて、往來の人々を眺め廻して居ると、其夕刻澤山な荷物を持つた一人の旅人が来て、「一夜の宿を」と云ふので、親爺は大喜びで「入つしやい!、御案内!」と威勢克く叫んだ、やがて女中は會釋してトある一室へ案内した、「お茶よ、煙



艸益よ」と家内總掛りでの大騒ぎ、さて親爺は女房に向て「何と好  
い鳥では無いか、久振りの客人を宿錢だけで返すのは残念だ、何と  
かして彼の行李の一つも巻揚げる工夫はあるまいか」と云ふと、女  
房も「然うさねえ」と小首を傾げて考へて居たが、やがて思當つた  
らしく「良人！ 有りますよ」と叫んだ、何ぢや、何んな工夫があ  
る！「ナニねえ、昔から好く云ふぢやありませんか、茗荷を喰ふと  
物忘れをするツて、ね、だから私は茗荷をドッサリ喰べさして、行  
李も靴も皆忘れさして遣らうと思ふのよ……」成程、好い所へ氣が  
附いた」と親爺も手を打つて、「流石貴様は利巧者ぢや、ウン俺より  
一割智恵が深いゾ」と喜んだ、其處で女房は早速茗荷の買出しに出

掛け、平も皿も汁の實も、皆茗荷盡めで夕飯を出し、翌朝も亦茗荷  
で責付けた、圖らず茗荷攻めに逢つた客は、やがて挨拶をして出て  
行つた、後姿を見送つた親爺はイヤナリ客の座敷へ飛込んだ、女  
房も後から直ぐに繼いで「モン良人！ 行李は重いでせう」「インニ  
ヤそんな物は無い！」其れぢやア靴ですか」「靴も無いよ」「アラ可笑  
いねえ、そんな筈は無いんだが」と云ひつゝ、女房も室へ這入つて、  
二人で座敷中搜して見たが、何も忘物が無いのでガツカリして、「好  
い面の皮だわねえ」と女房が溜息を吐くと、親爺が不圖思ひ出して  
「ウンあるよ」「何です？」「昨夜の宿錢を拂ふのを忘れて行きヤがつ  
た」



其九十二 身子の檀波羅密

昔天竺に身子と云ふ聲聞があつて、佛果を證せん爲に六波羅密の行願を全うせんと心掛けて、已に五波羅密は成就したが、残りの檀波羅密を修するに當つて、隣國より一人の婆羅門が来て「財寶を興へて呉れ」と云ふから、倉庫の中の家財は云ふに及ばず、着て居た衣服まで脱いで残らず渡した、すると「家屋も眷屬も欲しい」と云ふゆゑ、之も皆興へて惜まなんだ、婆羅門は猶も飽き足らで「貴方の身に生へて居る毛を貰ひたい」と云ふ、其處で身子は身の毛を一本づつ抜いて、之れをも悉く施して仕舞つた、然るに婆羅門は猶慾心

身子の檀波羅密

を逞うして、今度は「貴方の眼が欲しい」と云ひ出した、身子も之れには閉口したが、檀波羅密を成就しやうと思ふ一念から、遂に兩眼を抉り取つて婆羅門に興へた、婆羅門は其眼を受けてつぐつと眺めて居たが、やがて「肉眼と云ふものは、抉取ると汚いものだ」と云つて、大地に投げ捨て、足で踏潰した、此時身子は口惜しがつて「人の五體の中では、眼ほど大切なものは無いのに、其眼を左程用も無い癖に乞受けて、結局投げすて、仕舞うなどは、實に心外千萬な事ぢや」と恨んだ、で、瞋恚の焰は益々熾になつて、つひ其れが爲め菩提の行願も退慢に流れ、是れまで積んだ五波羅密は云ふまでも無く、六度の行が一時に破れて、遂に破戒の聲聞となつた



と云ふ。

佛陀遺教經に誡め玉ふて「若し人有り、來て節々に支解するとも、當に自ら心を攝めて瞋恨せしむること無るべし、亦當に口を護つて悪言を出すこと勿るべし、若し恚心を縦にせば即ち自ら道を妨げ、功德の利を失す」と仰せられた、事或は極端に失するに似たれど、道に志す者は斯程の覺悟なくては、かなはぬ事と信するのである。

### 其九十三

### 高野山懺悔物語

昔高野山に三人の僧侶があつて、三人共揃ひも揃つた今道心であつた、かく打揃ふて今道心となるに就いては、之も深い因縁であらう

から、各自に發心した動機を話さうでは無いか」と、四十計りの僧が口を切ると、「成程其れも好らう、懺悔滅罪と云ふ事もあるから……」と一人が合槌を打つ、すると今一人の僧が「先づ貴僧から……」と云つて、發議者に促した、で、其僧は「然らば……」と一膝乗出して、「さて拙僧は俗名を糟谷四郎左衛門と申て、十二三の頃より足利將軍に仕へ、常に將軍のお側を離れずして、神社佛閣へ御參詣の御供から、時の御所へ御登の節などにも隨從しましたが、或時將軍が二條家と云ふ、當時威勢の赫々たる御邸へお成になつて、我等一同はお供部屋へ下つて居ると、友達の一人が外から招いて「糟谷一寸來い、早く」と促しますから、「何だ、何事だ」と云ひつゝ、



立て見ますると、「此處から覗いて見よ」との事に、何心なく覗いて見ると、今御殿で酒宴でも始まつたものと見え、髪は身の丈に餘る程の婦人が、十二二重の美しい衣服に、緋の袴を着けて出て来たが、銚子を持って立た姿の優しさ、能く云ふ格だが小野小町か照手姫か、さては唐土の楊貴姫かと云ふ程の、世にも稀なる美婦人ゆゑ、圖らず心を動かしました、其れからと云ふものは、何となく氣も沈み勝で、引籠つてばかり居りますと、將軍家でも御心配下さいまして、醫師までも御遣はし下さる忝なさに、つひ事の仔細を申上ると、勿體なくも將軍家では、早速此由を二條家へ、申入て下さいました處が、何分この上臈尾上と云ふ婦人は、宮家の御人で御座るゆ

ゑ。陪臣の者へ下す譯には行かぬが、手前の方へ来るなら差問へないとの事に、一時は心も臆したなれど、遂に其意に随ひましたが、從來私は、毎月二十四日には、北野へ參詣致す常例の處、つひ二三箇月怠つたので、これでは濟まぬと、十二月二十四日の夜參詣して、一心籠めて通夜をして居ると、俄に騒々しい人聲で、「彼處の辻で人殺しがあつた、何處の何人かは知らぬが、若い女が殺されてある」との騒ぎに、「其りや大變！」と飛出して見ますると、こはそも如何に戀女房の、尾上が無慘の最後を遂げて居ますので、拙者の驚きは如何許り、生きた心地も致しませず、「嗚呼果敢ないものは人の身上、あじき無いのは浮世の常」と觀念致し、直に髻切り捨て、此



御山へ登つての今道心も、皆是れ尾上の菩提の爲め」と、涙ながらに物語ると、次は五十餘りの恐しげな一人が、「今度は愚僧が話しませう」と乗出して、「只今お話の、上臈殺しの犯人は斯く云ふ拙者で御座います」との一言に、糟谷入道驚いて「ナニ貴僧が殺した」と、キツと身構へたるを押静め、「お腹も立たうが一通り、お聞きなされて下さいませ、何を隠さう私は、京都三條の荒五郎と云ふ、極印付きの悪黨で御座いますが、十二年より盜賊を覺え、其れが嵩じて人殺し、永の年月悪事を働き、貴殿の戀人を殺すまでに、已に三百八十餘人と云ふ、多くの人を手に掛けましたが、彼の尾上殿を殺す前、四五箇月の間と云ふものは、する事爲すこと皆喰違ひ、

甘い仕事は更に無く、内を外に致しまして、昨日は宮の軒に寝ね、今日はお堂で夜を明すと云ふ始末、餘り仕事の無い處から、ブラゝ我家へ戻つて見れば、女房は見るより強抱つき、何と云ふ情けない人か、お前は其れで好らうが、後に残つた私等三人、食ふや食はずの其日暮し、假令私は何うあらうとも、二人の小供がお前の氣では、可愛くないのか不愆で爲いかと、口説き立てられた其時は、鬼を欺く拙者奴も、流石恩愛愛惜の、きづなに引れて涙を流し、嗚呼俺が悪かつた、宥して呉れ、今夜は必ず喜ばして遣ると、其儘家を飛出して、或塀垣に身を密め、往來の人を待受けると、やがて轎に乗つて威勢よく、通る者がありますから、ジツと様子を覗ひます



と、云ふに云はれぬ好き香が、ブーンと鼻を突きますので、ヤ、忝  
 なや、好い鳥御座なれと、イキナリ鞆をスラリと拂ひ、氷の刃を  
 突付けますと、供の奴等は仰天して、腰を抜かすもあれば逃ぐるも  
 あり、狼唄へ騒ぐを物ともせず、轎の戸開けて中を見れば、天女と  
 見まがふ上藹が、徐々と御装束を脱がせられ、すなほに渡して下さ  
 れたれど、慾には飽かぬ拙者ゆゑ、其小袖も貰ひたいと云へば、之  
 を取られては丸裸體、遣す事は相成らぬが、それとも、強て欲くば  
 殺して取れとの言葉、其れこそ固より願ふところと、只一刀に斬捨  
 て、衣服は愚か頭の道具まで、残らず浚つて跡白浪と、家へ歸れ  
 ば女房も喜び、かゝる美事な装束を、お着けなさるゝ人ならば、定

めて年齢も若からうとの事に、盗人の女房に似合はぬ、人情でも辨  
 へての問かと思ひ、夜目には確と知れぬども、何でも十七か八歳と  
 云へば、左様でしたかと一目散に、女房は表へ驅出したゆゑ、不思  
 議に思ふて待つて居ると、やがて女の頭髪を引掴み、内へ戻つて來  
 ましたから、何うした譯と尋ねますると、お前は盗人に似合はぬ無  
 慾な人ぢや、かゝる結構な頭髪を、捨てゝ來ると云ふ事があるもの  
 か、髻屋へ賣れば好い價になると、ニッコリ笑つた圖太さに、流石  
 の拙者も荒膽抜かれ、急に怖氣が付きました、かゝる女と連添ふて  
 は、如何なる憂目を見やうも知れずと、妻子を捨て、高野に登り、  
 名を玄竹と改めて、行澄すも上臈の爲め、貴僧の戀人を殺したは、



全く愚僧の仕業ゆゑ、此身は貴僧にお任せ申せば、如何様にも腹癒しられよ、爲すがまゝになり申さう」との長物語、聞いた糟谷は腹立しながらも「浮世を捨て、發心致し、身に墨染の法衣を纏ふ上は、敵も無ければ味方も無し、打つも打たるゝも怨親平等、何で怨恨が御座りませう、其れにつけても尾上こそ、我等が爲には善知識、何分回向を頼みます」と、法衣の袖を絞りつゝ、二人が懺悔の物語に、今一人の今道心も、貫泣して未永く、三人共に修行の功を積んだと云ふ。

其九十四 亡夫墓前の服毒

因果と云へば一口に濟む事なれど、人の運命と云ふものは、随分不思議な現象を表はす事がある、明治三十九年八月二十八日の國民新聞や、其他二三の新聞に斯う云ふ記事が載つて居た。賣藥で名高い越中富山の水岡カツ（二十）と云ふ者は、十五年前高等小學校を卒業すると間もなく、繼母の折合が面白くないので、東京の京橋に住む親戚の家へ手頼つて来て、何か身を立つる方法もがなと相談の上、翌年神田神保町の肺病専門醫なる、高木醫院の見習ひ看護婦となつた、其後カツは一人前の看護婦となり、天性伶俐な女ゆゑ人々の信用も厚く、其れが爲め銀行員や會社員や、さては華族其他上流の社會にのみ雇聘はれて居たが、世話する人があつて靈岸



島の活版業を営んで居る、山岡儀三郎(三十歳)と云ふ者に嫁いだ、其れより夫婦仲至つて睦じく、長女ミサヲ(七歳)次女キミ(五歳)長男義信(三歳)の一男二女を儲けたが、フトした風邪の氣味から良夫は病の床に就き、次第に重くなつて、遂には肺結核と云ふ診断を受けた、で、静養の爲め、家族一同儀三郎の郷里なる滋賀縣に歸つて、八日市と云ふ處へ借宅して住つた、妻のカツは多年經驗の看護の技倆を振ふは此時と、夜の目も合さず手て手を盡したが、不治の難病は是非もなく、儀三郎は其年十一月と云ふに、遂に歸らぬ旅へ赴いたのであつた、カツは杖とも柱とも手頼る良夫に死別れ、三人の幼兒を抱へて中野村と云ふへ引移り、六七百圓の遺産を力に暮して居たが、

纖弱き女の、まして三兒を抱へし身の、何の手業も出来ぬゆゑ、次第に所持金も減つて仕舞ひ、親戚の人々は心配して婿を迎へよと勧めたが、カツは兩夫に見えぬと云つて承知せず、僅に菓子の小賣を始めたが、其れさへ馴れぬ商買の手違ひ多く、資本も次第に喰込んで、今は二進も三進も行かぬ様になつた、で、カツは今更悔めど詮方なく、此上は亡夫の跡を追ふて、未來で仲能く暮さうと、衣類其他の品々を近所の人々へ頒ち、親類へも餘所ながら暇乞ひして、夜の十二時頃に三人の兒を連れ、泣く泣く亡夫の墓地へ辿り着いて、生ける人に物言ふ如く、其身の腑甲斐なさに兒の養育すら出来ない罪を、懇々と石碑の前で詫て、豫て用意のモルヒネを出し、先づ長



女ミサヲに飲まさんとせしに、不思議や氣の迷ひとも見えず、亡夫の姿がアリくと現はれ、开を止むる様子であるから、思はず其手を離して一旦我家へ歸つたが、別に好き分別も出ないゆゑ、復もや決心して、今度は晝日中墓前に赴いて、「お父さん、今参りますよ」と、頑はない小供に云はせ、弱る心を引立て、先づミサヲに服せしめた、毒は直に廻つて、懺弱い少女の苦み出すを見ては、身も世もあられぬ思ひに、圖らず逃出さうとしたが、又氣を取直して心を鬼にし、キミと義信の兩兒に服せしめ、残る毒をば一口に吞乾し、母兒四人が抱合ふて、四苦八苦の苦みをして居るのを、附近の人が聞付けて、早速醫師や親戚を呼び集め、手厚き治療を施したれば、

亡夫の一念も通じたものか、四人ともく危き生命を取止めたと云ふ事である。

其九十五 孝女の赤誠

或處にお杉と云ふ哀れな少女があつた、渠女は疾くに父を失ひ同胞に別れ、去年の秋の暮に唯だ一人の母をも失つて、今は全く三界に頼りなき孤獨の身となつたのである、で、近所の誰彼となく不惑に思ふていたはつて居たが、渠女は或人の情けに依て程遠からぬ市街の、某家の女中に住込む事が出来たので、お杉は天にも登る心地して後生大事に奉公の誠を盡して居た、然るに此の家には猶多くの下女



や下男もあつて、中には随分亂暴な者も居ると見え、一日勝手元の鉢を壊した者があつて、女中頭は厳しく吟味した、一同の者を集めて誰の仕業かを取調べたけれども、誰も「私が壊しました」と云ふ者は無い、女中頭も困じ果て、如何はせんと躊躇ふて居ると、恐るゝ新參者のお杉が前に進んで、最と柔順に両手を着いて「誠に申譯が御座いませぬ」と詫入つたので、女中頭も田舎出の無作法者と同情つて、後日を誠めて其日は済ましたが、其れより兩三日経過すると、又もや桶の底を抜いたものがある、處が相變らず犯人は出ない、此時も深く吟味をしたけれど、誰も「私だ！」と名乗つて出る者は無つたが、涙ながらに例のお杉は、「無作法者の思はぬ過ち、

何卒お赦し下さいませ」と、復もやお詫を申入れたので、女中頭も呆れは爲たものゝ、今に事に馴れて來たらば、満更斯うでも無らうと、其日も厳しく將來を誠めて、其儘済したので有た、然るに其後も屢々斯る兪相が續いて、其度毎に女中のお杉が謝罪ので、今は女中頭を始め夫人までも不審に思はれた事であるが、半信半疑の裡に今日と過ぎ明日と送くる内に、今年も早や七月と云ふ月に這入つた、此家には本年十一二歳の男の兒がある、今しも奥の座敷で其兒が遊んで居ると、一匹の赤い蜻蛉が室内に飛込んだ、俗に精靈蜻蛉と云ふ小さい美しい蜻蛉なので、小供は之が欲しさに捕へやうと思ふて、座敷中追廻した、追廻はされた蜻蛉は床の間へ逃込んで、花瓶に挿



してある花の影に止つたので、小供は喜んで差足拔足して側へ寄り、今しも小さき手を伸べて其尾を捕へんとする一刹那、蜻蛉はブウと飛んだ、小供は倉惶て手を揚げた、其途端に大きな袂が花の枝に引懸り、花諸共に花瓶を倒して粉微塵、流石に小供も驚いた、花瓶は先祖傳來の古器で、盆か正月でなければ滅多に出した事の無いお家の重寶、幼心にも渠は其れを知つて居るから、父の怒りを恐れて、フイと表へ飛出して、何喰はぬ顔をして居た、やがで夫人は座敷を見廻つて此有様を眺め、大に驚いて女中を吟味した、「今日の座敷掃除は誰の當番ぞ、大切な花瓶を壊したのは誰が仕業ぞ」と、一同を集めての直々の吟味であつたが、常とは違つて夫人の荒い權幕と、

相の大きいのに恐れを懐いて、誰一人口を利く者も無い、今日は女中頭までが閉口して仕舞つた、「サア誰か覚えがあらう、黙つて居ては事が濟まぬ」と、厳しい糺明に一同片唾を呑んで居ると、例のお杉が青蒼た顔に朱を灑いで、涙片手に夫人の前に泣崩れた、一同の視線は渠女の上を集つた、夫人は柳眉を逆立て、「汝の仕業かツ、何うして彼んな魚相をお爲かえし」奥様、何とも申譯が御座いませぬ……と歎歎しつゝ、猶も言葉を繼いで、「一度ならず二度三度、魚相ばかり致すと云ふも、皆私が不束ゆゑ、鈍に生れた此身の因果、如何様にもお刑罰を願ひます」と、云ふも切なる涙聲、女中頭も聲荒らげ「何うして其んな魚相をしたのです、其譯をお話しッ、何時



もく、汝さんは龜相をするのが商賣ぢや無いか、ハイ何とも早や申譯は御座いません、實は今朝程お座敷のお掃除を致さうと、埃拂ひを遣つて居りますと、お花の枝に其先きが卷着いたのを知らずに、引きましたものですから、つひお花瓶がひつくり返りまして、床縁で壞して退けました、何とお詫びの申様も御座いません」聞いて夫人も有勝の過ちとは察したが、兎に角日頃の龜骨と云ひ、此度は掛替の無い重寶を形無しに爲たのだから、此儘にも過をされず、且は外の奉公人への見せしめもある事ゆゑ、遂に良夫とも相談して、お杉を解雇する事にした、「汝には氣の毒ではあるが、檀那様も殊の外御立腹で、お詫の爲て見やうも無いから、一ト先づ今日から何れへ

なりと行つてお呉れ」と、奥様から宣告を受けた時には、流石にお杉も驚いた、其れや其筈である、渠女は當家を退くが最後、廣い世界に片時も身を置く場所が無いのである、全く沖に漂ふ捨小舟同様で、更に取着く島も無いのだ、けれども今更何と詮方も、なくく暇を告げて出立した、朋輩の中には密かに同情を寄せて、影で泣いた者もあつた、無論、奥様とても袂を濡したのであるから、幾何程かの錢別も與へて、「何處で暮すにしても、身體を大切にしていね」と、優しい注意を與へた程であつた、今しもお杉は自分の所持品を一風呂敷に纏めて、涙と共に背負ひつゝ、一足行つては立止り、二足歩んでは振返り、泣きつ獻獻つ行く後姿を、何處から見て居たも



のか此家の小供が認めて、驚いて家に驅込み母の袂に取褪つて、「お母様、杉女を追出ては嫌やよ」と異様に叫ぶので、母は「坊や何を云ふのだえ、杉女はお父様の大事なお花瓶を壊したから、其れでお父様が御立腹遊ばして、今暇を遣した所なのです」と云ふと、「花瓶を壊したのは杉女ぢや無い、坊だよ、坊が袂で引懸けたんだ」と云ふゆゑ、「其れやまた何うした譯だえ」と尋ねた所が、小供心にも辜なき者に迷惑を掛るが悲しく、蜻蛉取りの一條から床縁で壊した事を、残らず白狀して、「お父様に叱られるから、内密で遊びに行つたんだ」と附加へた、で、母親も事の意外に驚いて、早速良夫にも其由を告げ、急いでお杉を呼戻した、而して其顛末を語つた末「何

で汝は人の罪を引受けたのか、今自分が追出さるゝまでも、人の罪を背負うと云ふに就いては、仔細が無うては叶はぬこと」と尋ねた所が、お杉は一入悲しい聲で「坊ちやんが然う白狀なされた上は、何をお隠し申ませう、何ぞ一通りお聞きなされて下さいませ、檀那様も奥様も豫々御承知の通り、去年の秋の暮つ方、タツタ一人の母を失ひまして、此年は初盆の事で御座いますけれど、同胞も無ければ親戚も無く、有甲斐なき私一人の事で御座いますれば、盆が來てもおいとしや、お經一卷上げて貰ふ事も出来ぬのみか、一枝の香花や折れた線香さへも手向ける事はなりませぬ、其れ故日頃私の思ひますには、數多ある奉公人衆の中には、時々誤つて倉相を爲さるお方



もあれば、其度毎に其罪を着てあげたら、自然其人も喜んで下さらうから、せめては其れを亡母に手向けの功德と存じ、何誰の罪に限らず引受けて、是れまで善根を施したので御座います」と、始めて明す渠女の孝心、夫人も思はず貫泣きしたが、側に聞き居し數多の女中等も、覺えずお杉の真心に感じ、「何時ぞや桶の底を抜きましたのは、私で御座いますから何うぞ御勘辨を……」と云ふ者もあれば、「摺鉢を壊つたのは私で御座います、何うぞお赦しを……」と詫びる者もある、然かと思ふと、「皿を壊したのは私で……」茶碗は私……」と云つた様な調子で、是れまでお杉が背負つて居た罪の犯人が、一時に皆出て仕舞つたのである、其處で最早や疑ふ餘地も無く、自

※。默然心受

然に晴天白日の身となつたのみならず、實に感ずべき孝女であること云ふので、お杉は一同の賞賛を受けて、再び此家に引戻され、末永く奉公の誠を盡したと云ふ事であるが、渠女が手向けし善根功德は、實に草葉の影の母親も、千部萬部のお經に増して、一入難有く感じたであらう。

### 其九十六 默然心受

信夫怒軒先生の義士談の中に斯う云ふ話がある。

元祿十五年三月十四日、淺野内匠頭が殿中（五代將軍綱吉公）に於て、吉良上野助を刃傷に及んだ廉を以て、直に芝愛宕下田村右京太



\*  
黙然心受

夫の屋敷へお預けになつたが、今日正七つの刻限に切腹と云ふ時のこと、内匠頭が居る所は小書院である、(大名の屋敷には皆大書院小書院と云ふのがあつた) 誠に悄悄として残る蕾の花一つ、水揚げ兼ねし風情なりと云ふ様な工合で、茫然と致して居る處へ、今朝まで自分の側に居た片岡源五右衛門が、役人多門傳八郎の許可を得て、圖らずも目通りを致したゆゑ、飛立つ程に喜ばれたけれど、流石五萬三千石の太守、豫て覺悟の生命であるから、永訣を悲む様なことは決して無い、天命が來たのだと諦らめて居られる、源五右衛門胸中を推量して、唯々恐入つて平伏して居る、場處は一間を隔て、居るが、あれは昔の君臣の禮である、渠は數行の涙を推隠して、胸を裂るゝばかりに殘念に思つて居るが、思ひは同じ内匠頭も、矢張り胸中では泣いて居らるゝであらう、側に田村家の役人が居るからでもあらうが、兩人は一言の言葉も交さ無い、芝居ですると、「ヤレ由良之助待兼ねたわえ」、「ハ、御存生の御尊顔を拜し、身に取て何程か……」

「オ、我も満足、」  
 定めて仔細は聞いたであらう、サ無念口惜いわえ「委細承知仕る」何の蚊のと演る所だが、中々然うでは無いのである、唯々、所謂「黙然として心受する」と云ふ事が、法華經の提婆品にあるが、其れと同一だ、佛陀が小乗教を説かるゝ内は、女人は成佛が出來ぬと仰せられたが、法華經を説くに及んで、始めて八歳の龍女に成佛を許された時に、龍女は唯々難有くて、何とも云

夫の屋敷へお預けになつたが、今日正七つの刻限に切腹と云ふ時のこと、内匠頭が居る所は小書院である、(大名の屋敷には皆大書院小書院と云ふのがあつた) 誠に悄悄として残る蕾の花一つ、水揚げ兼ねし風情なりと云ふ様な工合で、茫然と致して居る處へ、今朝まで自分の側に居た片岡源五右衛門が、役人多門傳八郎の許可を得て、圖らずも目通りを致したゆゑ、飛立つ程に喜ばれたけれど、流石五萬三千石の太守、豫て覺悟の生命であるから、永訣を悲む様なことは決して無い、天命が來たのだと諦らめて居られる、源五右衛門胸中を推量して、唯々恐入つて平伏して居る、場處は一間を隔て、居るが、あれは昔の君臣の禮である、渠は數行の涙を推隠して、胸を裂



はずに、默念と心受したのである、是れが本統でせう、彼の自分の内の主人が遠方へ行くとか云つて、近所から暇乞ひに來たり、或は自分の家に不幸でもあつた時に、ホンの義理一遍の悔みを云ひに來る人々は、色々な事を云ふものだが、肝腎の親子兄弟や、妻子の様なものは、其様に澤山口敷を利くもので無い、唯だ「難有う御座います」「何分宜しう」位の事で済むものである、彼の稻川が二百兩の金に差問へて、鐵ヶ嶽との取組に、大事の角瓶を負けねばならぬ一刹那、女房が身を賣つた二百兩を以て、「東西く、金子二百兩、最負より、稻川關へ」と、土俵で言葉が掛つたのを聞いて、急に引繰返して鐵ヶ嶽を投付け、好い心持ちで稻川が、ブラッ／＼返つて來

る所へ、芝居ですると、北野屋七兵衛だが、其女郎屋の亭主が、稻川の女房を駕籠に入れてやつて來る、亭主は言葉を掛けて「イヤア關取！今日の角瓶は……」「ヤア見たかえ」「見たどころぢやア無い、何やら初めの取口が悪かつたから心配したが、引繰返した其強さ、實に豪いものぢや」「イヤモウ譯があつて、太う取悪くかつたが、其譯と云ふのは……」「イヤ其金を遣つた旦那様は、此處に在つしやる、お前一寸逢ふて禮を云はッせ」と云つて、女房の乗つて居る駕籠の端を揚げる、「ワレヤ女房！」「稻川殿、随分おまめで居て下さんせ」「何にも云はぬ、辱けねえ……」「此何にも云はぬと云ふ所が、極々の心中である。



其九十七

乞食月僊の無爲欲

凡ての佛に四種の大欲があつて、之を四弘誓願と唱へて居る、第一は「衆生無邊誓願度」第二「煩惱無盡誓願斷」第三「法門無量誓願學」第四「佛道無上誓願成」此四大欲心は如何なる佛にも皆具つて居るのであるから、四弘誓願と名けたのであつて、凡夫衆生が如何に強慾であつても、此四大誓願の大欲には到底及びも附かぬのである、殊に凡夫の欲は私心私欲の有爲欲であるゆゑ、有害無益であるけれども、佛の四弘誓願は無爲の欲であるから、實に最尊最貴の欲心である、故に吾等お互も、早く持前の有爲欲を捨て、此無爲

の欲心を逞うせねばならぬ。

今より百年計り以前、予が郷里なる伊勢の山田に、乞食月僊と呼ばれた奇僧があつた、月僊は名を元瑞、字を祥譽と稱へたる淨土宗の僧侶であつたが、天性書を好くし蕪村、應舉の風を交へて一新機軸を出した人である、而して其畫く所の人物が何れも寂寥として恰も乞食の如くである故、世人が乞食月僊と綽名を附けたのである(或は云ふ、月僊所思あつて餘りに潤筆料を貪りし故、斯く卑められたり)後山田の寂照寺に住し文化六年に歿せられたが、生前志す所が有て頗る潤筆料を貪つた、渠は凡そ金と云ふものゝ爲には、如何なる潤筆料をも辭さなかつたと云ふ事である、其一例を擧ぐれば、或

乞食月僊の無爲欲



時土地の娼妓から幅物を一本頼まれて、早速潤筆に取掛り、出来の上自ら持参したのであつたが、其時彼の娼妓は客と酒宴の最中であつた、然るに月仙の風彩と云ひ態度と云ひ、如何にも面白く無つたものと見へて、娼妓は其潤筆料を月僊に投付けて、持つて来た書は己が腰に巻き、言葉汚なく「汝の書は汚はしいから床に掛ける價値は無い、私の腰巻位が相當して居る」と云つて、満座の中で大に耻しめた、けれども月僊は平氣の平左で、「イヨ、如何にも能く似合ひました」と云つて、料金を頂いて飯つて仕舞つた、然るに其後當時畫家を以て、之も有名な大雅堂先生、九霞山樵が諸國遊歴の因みに月僊を訪ふて、「釋迦の教は無欲を以て貴しと爲すに、貴師は格外

に潤筆料を食ると云ふ話だが、甚だ不如法なる所業ではあるまいか斯くては貴師一人の耻辱に止まらず、延いては佛家一門の汚名になると存ずる」と忠告した、すると月僊は「貴殿の御忠告は忝う存ずるが、之れには聊か仔細が御座る、其譯と申すは、前年當界隈頗る不作であつて、殊に拙僧が村落などは目も當られぬ程の凶荒ゆゑ世の書畫を弄ぶ様な富貴な者から、充分畫料を取つて飢餓の貧民を救うと存じ、已に五百金と云ふ大金を得て山田奉行に托した程で御座る、又我が太廟に詣ずる道路が、頗る嶮惡を極めて居るので、師匠も常に憂ひて居られたゆゑ、其遺志をも繼いで、是れまでに早や三百金を投じ、道路の修理を致して御座るが、中々之れとてもまだ



十分では無く、殊に又御覽の通り當寺も頽破に及び、師匠も常々苦辛されたが、遂に素志を貫徹する能はずして逝かれた事ゆゑ、此精神も受繼いで、報恩の爲に改築せんと企てまして、略々其用意も整ふたから、こゝ三年の内には必ず成功するであらうと存する、旁々、かゝる心願あつての乞食根性、決して私心私慾に驅られた譯では御座らぬ、其れ故この三つの大望さへ成就すれば、拙僧は立るに筆を燒き硯を捨て、心を澄まし、佛弟子たる本分を明らかにして、名譽も財寶も塵芥と見て暮らす所存、何卒御諒察が願ひたい」との事であつたから、大雅堂先生も始めて月僊の眞意を解し、大に其心願に感激して、涙を流して喜んだと云ふ事であるが、此月僊の如き

は實に無爲の欲を完了した聖僧と云ふべきである。

其九十八

オビダーの旅行

昔オビダーと云ふ少年があつて、一日印度曠原の旅行を企てた、朝疾く宿所を出發して其途に就いたが、昨夜は思ひのまゝに熟睡して、今朝の心氣は自ら爽快かに、胸には種々の希望を懐いて、手の舞ひ足の踏む所を知らぬと云ふ様な調子で、一生懸命に平原を走つたのであつた、時は彌生の春の半ば、耳には極樂鳥の謳ふを聞き、目には百花の咲續くを視、身は香ばしき朝露に浴して、快き軟風に身心を清めつゝ、快樂五體に満ちて又一事の心頭に懸るものは無つたの



である、然るに旅行漸く進んで、其日の正午に近い頃は、炎熱著しく加はつて、身も焦けんばかりの苦しさに、朝來の銳氣も次第に挫けて、オビダー覺えず立停つた、而して「もう少し樂な途は無い事か」と、頻りに四方を見廻し、偶々右手の方に當つて一の鬱蒼たる林を發見したので、渠は喜び勇んで其木陰に驅込んだ、見れば流れも清き谷川の水が、綠滴る林を縫ふて潺々と流るのである、襟懷宛ら洗ふが如く、其樂しさ快さ、實に筆紙の盡し得る處では無い、去りながら、旅行の途中に於て永く停る譯にも行かねば、名残り惜くも再び出發せんとした、すると林中に一筋の小徑があつて、其兩側には百花各々研を競ふて咲亂れて居る、然も其方向は己が辿

る曠原の大道と併行して居るやうであつた、其處でオビダーの思ふには「此小徑を進んだならば、自ら快樂と旅行の目的とを兼ねて、兩つながら其功を奏して、何の苦もなく好結果を得るであらう」と合點した、吾等お互も菩提の彼岸に達するまでには、種々の困難や障礙に遇ふて、端なくも妄想分別を起すものだ、オビダーは終に其小徑を取つて進んだのである、斯くて數十町を過ぎた所が、徑路の方向が少しく變つて來た、谷川の水が落ちて瀑を爲し、林の繁茂が其れを蔽ふて、晝尚暗い様な怪しげな間に屈曲して居る、少年は聊か躊躇し、「馴れた道を捨て、かゝる小徑に這入り込んだが、果して是れで好いか知らん」と心の中で私語て、稍々暫らく考へた末、



「イヤ、此日中最中に、塵粉漲る大道が何うして通れるものか、此小徑は少々曲つては居るが、これは土地自然の形勢であるから、今に大道に出れるであらう」と、勝手な理屈を附けたのである、吾々とても其通り、悪事を働きながら悪事にあらずと思ひ、墮落を爲ながら墮落で無いと獨で極めて、つひく永劫浮ぶ瀬も無き悪業の淵に沈むのだ、今オビダーも自分勝手の理屈を附けて、進む事は進んだが、満更安心の出来た譯でも無つた、で、渠は其不安の念を慰めんが爲には、所有方法を講じたのである、優しい鳥の聲音には耳を借した、美しい花の色香には眼を注いだ、のみならず小丘を崖を攀ぢては新しき景色をも眺めた、けれども進むに随つて何と

なく正路に遠かる様な氣がした、サア斯うなると不安は不安を重ねて露る、時は無い、心は千々に碎けて身も世もあられぬ思ひをした、而して今は何處に旅行するのであるかさへ、我れながら知る能はざるに至つたのであるから、精神も自ら錯亂して獨り茫然と立停つた、進まぬか正路に遠かるの恐れあり、停らんか早や已に時間なし、搗て、加へて一天俄に曇り夕陽西に傾いて、暴風さへも四方に起つたのである、進退谷るとは實に此處の事だ、オビダーも始めて其身の不覺を悟つた、熟路の苦熱を凌ぎ得ずして徒らに樹林に休息し、唯だ易きをのみ擇んだが爲に、竟には幸福の凡てを失ふに至つたのを哀んだのである、今吾々とても同じ事で、一時の快樂や一時の慰安



に心を奪はれて、永久の快樂や慰安を無視すると云ふと、竟には此少年の如き悲境に陥らねばならぬ、流石にオビダーも其非を悟りは爲たもの、今更既往を追悔したとても追着く事では無い、渠は此際爲し得らるべき事を爲すより外に道は無いと覺悟して、先づ自ら地に俯して死生を天に任せた、而して稍々心氣を静め、身を休めた後に、再び起つて先の小徑を戻つて、曠原の大道に通ずる方向を探つたのであつた、時に夜は益々更けて風も一入勢ひを増した、加之ならず餌食を獵る猛獸の怒號は、岩に激する谷間の急流に和して、其物凄き光景何に喩えんやうも無い、オビダー今は必死の勇を鼓して、かゝる危険の中を夢中に奔走した、されど一步は一步、安全の

路に近づくものか、將又死地に踏入るかは固より知る限りで無い、かくて身は大に疲勞を覺え、胸の慟悸も激しくなつて、呼吸も絶えなく立すくんだ、最早や足戰慄して一步も進まぬと云ふ有様で、覺えず大地に倒れんとする途端に、遙か彼處の木影より漏れ來る一の火光を認め、而して渠は始めて蘇生の思ひを爲した、「地獄で佛」とは實に此事だ、オビダー喜び勇んで火影を便りに辿り着た、其處には小さき草の菴があつて、年老いたる一人の隠者が住つて居た、少年は戶外に停立して懇慫に言葉を通じ、竟に其中に入る事を得たのであつた、隠者は豫て集拾せる食物を出してオビダーに進め、深く其身を勞はり呉る、忝さに、渠は感泣して其親切を受けた、やが



て隠者はオビダーに向つて「予は此山中に棲む事、殆ど茲に二十年、是まで唯の一人たりとも、訪ひ來しものはあらざるに、今御身一人、かゝる深山へ分入りしは、如何なる譯ぞ審に語れ！」との言葉に、

オビダーは毫も隠すところなく、其日の旅行の顛末を明らかに述べたのである、すると隠者は「御身が今日遭遇せし過失と危難とは、深く御身の魂に銘じて、必ず永く忘れ玉ふな、抑も人間の一生涯は、丁度今日の旅行と同一ぢや、最初吾々が眼を覺まし、少年の曉には、鋭氣身心に満ちて種々の希望は大海の如く、暫しは有爲の志望を抱き、徳義の正路を辿ると雖も、浮世の風波に揉るゝに及んで、其志操は漸く挫け、義務の遂げ難さを感じて、却て岐路を踏むの易さに

迷ひ、一時の情慾に制せられて、遂には不測の災害を招くに至るのぢや、初の中こそは、心に不正を感じも爲やう、恐怖の念も抱きは爲やう、されども、月日重る其内に、不正の感も恐怖の念も、何つしか消失するのみならず、迷は益々迷を重ね、快樂より快樂を追ふて、贅澤の間に身を沈むるうちに、最早や老年の晩景と變じ、疾病苦難は行手を妨げ、つひ爲す無くして倒るゝに方つて、始めて一生の不覺を悔ひ、正義の道を踏まざりしを嘆ずるも、最早や此時は已に手後れと云ふもの、シタが御身とても、鋭氣は已に徒費せるものゝ、猶探るべき道の無きにもあらねば、是より翻然心を改め、能く勉め能く勵まば、決して其望絶えたりとは云ふ可らず、路に迷ひし



旅人も、迷ひくし其上にて、正路に歸るを得べければ、御身も生命を天に任せ、力を神佛に祈りつゝ、今夜は此處に休息して、明朝改めて旅路に就け」と、最と懇ろに誠められたので、オビダーも涙ながらに感泣したと云ふ事である。

今吾々も其通り、一戒光明の赫灼たる、即心是佛の正路に在りながら、其發願の遂げ難きと、行持の果し難きに躊躇して、遂には三毒五欲の邪路に迷入り、眼前の安慰と快樂とに心を奪はれ、「惡を造りながら惡に非ずと思ひ、惡の報あるべからずと邪思惟（修證義）」して、幾歲月を徒費するゆゑ、生々世々四苦八苦の苦境に沈淪して、出離解脱の望も絶るのであるけれど、早く懺悔の一念に、無始劫來

の罪障を消滅せば、再び本の正路に歸るを得て、本來成佛の本分を盡す事が出来るのであるから、早く勇猛精進せねばならぬ。

### 其九十九 孟子と顔叔

猥褻なる自然主義の流行せる今日、聊か偏窟に失する嫌ひはあれど、下の如き話柄も満更無益では無からう。

支那の大賢孟子のことは三尺の童子も好く知る所であるが、其夫人は田氏と云つて、此も世に稀なる賢夫人であつたが、或夏の眞最中、餘りの暑さに堪え兼ねた夫人は、密かに己が部屋で諸肌脱いで涼んで居た、すると其處へ突然孟子がやつて来て、一瞥見るより不快の



念を抱き、物をも言はず部屋へも這入らずして、グイと行つて仕舞つた、其處で夫人は大に立腹して姑の前へ出た、云ふまでも無く、

姑と云ふのは三遷の教と斷機の誠とを以て、世に賢母の龜鑑と謳はれて居る孟母の事である、今しも其姑の前に出た夫人田氏は、「かね／＼妾が聞いて居りますには、お互に其私室に干與せぬのが夫婦の道ぢやと申す、然るに今日妾が、密かに情容を爲して室内に居りますと、圖らず檀那樣が御覽になつて、勃然としてお歸り遊ばしましたが、此の如きは妾を客扱ひにすると云ふもの、憚りながら婦人と申す者は、お客として外泊するものではありません故、今日よりお暇を頂戴して、父母の許へ歸りたう存じます」と申た、すると

姑は之を聞いて、直に孟子を呼着けて、「禮記の中に、將に門に入らんとしては孰か在于やと問へ、敬を致す所以なり、將に堂に上らんとしては必ず聲を揚げよ、人を戒むる所以なり、將に戸に入らんとせば必ず下を見よ、人の過を見んことを恐るゝ爲なりとあるが、今御身は自ら禮を察せずして、却て人を責むると云ふ事ぢやが、此れや御身の方が悪からう」と諭されたれば、孟子も大に後悔して夫人を留めたと云ふ事であるが、夫婦の間であつてさへも、嚴格にせねばならぬ事は此の如くである。

又昔支那に顔叔子と云ふ獨身者があつたが、其隣家に一人の嫠婦が住んで居た、兩人とも家族も何も無い獨物である、ところが一夜俄



に暴風雨が起つて、屋根を吹抜き壁を倒すと云ふ様な大荒れを爲た、其れゆゑに婆婦さんも大に驚いて、隣の顔叔の許へ逃込んだ、すると顔叔も聊か迷惑はしたが、今の場合を氣の毒に思ふて、助けて婆婦さんを室へ入れた、けれども人の嫌疑を恐れて夜中焼火をして起きて居た、而して薪が無くなれば屋根の木材を外しては炎して居たが、其れでも尙疑へば疑ふ餘地もあると思つた、若し妙な嫌疑を是非避けやうとするには、彼の魯人の如くにせねばならぬと思ひ浮べたのである、其れは、魯の國に一人の男子があつて、唯獨り住んで居た所が、矢張り其隣に獨住居の婆婦が居て、同じ様に暴風雨の夜、其男子の許へ逃げて行つた、すると其男は堅く戸を閉ぢて中へ入れな

い、而して云ふ事には「拙者が聞いて居るには、男女六十にならねば決して一處に居るもので無いと云ふ、然るに今御身は年幼く、拙者も亦幼い事であれば、氣の毒ぢやが家に入れる事はならぬわえ」と告げた、ところが其婦人は「貴殿は何故其様な頑固な事をお仰るのです、彼の柳下惠を御覽なさい、頼みもせぬのに若い婦人を抱いて暖めたが、其れでも世人は不都合ぢやとは云はなかつたぢやありませんか」と詰つた、すると其男は「柳下惠は其れでも好らうが、拙者は然うは行かぬ」と云つて、トウ／＼跳附けたのであつた、今顔叔は此話を思浮べて、全く人の嫌疑を避くるには、これで無ければならぬと覺悟したのであるが、孔子も之を評して、「世人は柳下惠



を學ぶよりは、顔叔、顔叔よりは魯人を學んだ方が安全ぢや」と仰せられたと云ふ事である。

### 其百 驢馬と雲水僧

我が教授、忽滑谷快天先生の名著、禪學講話に斯う云ふ話があつた。昔或山寺にアンチンと、チモシイと云ふ二人の雲水僧があつた、夏日行乞に出て、多くの麥や米を貰つて脊負ふて寺に歸る途中、荷物は重もし汗は流れる、非常に困難したが、アンチンは元來お心好しの僧で、少しも悪意はないから正直に荷を負て行く、チモシイは道樂坊主で酒も飲み魚も食ふ、オマケに全身豚の様に肥えた大入道で

あつたから、荷物を負て苦しげに後より尾いて歩みつゝ、何か好い方便を回らして、此重荷を寺へ送らうと思案した、良々久しくして二人は一の林の所に來ると、一頭の驢馬が木に繋いである、チモシイは是れ幸ひと荷物をおろして馬に乗せ、アンチンの荷物もおろさせて之を積み、此馬を寺へ引いて行くやうとアンチンに申すから、アンチンは何の分別もなく驢馬を引て寺へ歸つた、其跡でチモシイは馬の手綱を解いて己が頸に纏ひ、一方の端を樹に繋いで其蔭で午睡して居た、すると馬の主人なる次郎は、山より薪を伐つて出て來て見れば、馬は何時の間にもやら大入道となつて居る、其處で呆然自失、どうした事かと思つて見れば、チモシイはヤラ身を起し、空涙



を流して申すには「次郎さん、私は隣村の山寺に住む、チモシイと云ふ雲水で御座りますが、餘り多く魚を食つたり、酒を飲たりした爲に、現身に驢馬と化して、御身の家に買はれて行き、其れよりと云ふ者は夏となく冬となく追使はれ、草と藁ばかり食ふて苦役をした、其れで漸く罪も減びて再び元の出家の身に立歸つた、どうぞ一旦驢馬となり主人となつて、御身と主従の縁を結んだ者だから、今晚は御身の家に止めて呉れ」と云へば、次郎は氣の毒に思ひ、「貴僧と知らば斯く使役するではなかつたに、知らぬ事とは云へ可愛さうに甘い物も與へず、定めて辛い事であつたらう、其代り今晚は少し御馳走をする程に、堪忍して賜はれ」と云ふ、チモシイは此處ぞ

と付入り、「然らば主人の御心に従ひ、今夜は充分酒肴を頂戴する」とて、二人連立つて次郎の家に戻りました、次郎は早速其妻や下男に命じて酒肴の用意を十二分に致し、チモシイを饗應した所が、彼は長鯨の百川を吸ふが如くに、杯を左手に箸を右手に、飲では食ひ食では飲み、息をもつがず飲食するゆゑ、次郎は大に心配して「其様に飲食して、再び元の驢馬になつてはならぬ、静に召しあがれ」と云ふに、チモシイは「長の年月草と藁のみ食したれば、空腹にて致方なし、假令再び驢馬になればとて、飲めるだけ飲み食へるだけは食はして給はれ」と、熾に飲食し醉眼朦朧となつて、次郎が妻に戯れ言がへ云へば、次郎は一方ならず心痛して、辛くも其夜はチモ



シイを臥床に眠らせた、翌朝に至りチモシイは「大に厄介になりま  
した」とて、次郎の家を立出で、悠々と山寺へ歸りまして、方丈に  
面會し「昨日アンチンの曳き來れる驢馬は、隣村の次郎が菩提の爲  
に寄附するとの事で御座る」と云へば、方丈は「其れや殊勝な事ぢ  
や、去れど山寺に驢馬は不用ゆゑ、市に賣つて金にせよ」とて、馬  
市場に出した、然るに次郎は驢馬を失ひしゆゑ、市場に出で、善  
馬を買はんと、此處彼處を見廻すと、チモシイと全く同じ驢馬が居  
るから、非常に駭き、折角出家に返つたばかりに、餘り多く飲食し  
て再び驢馬になつたものと思ひ、馬の耳に口を當て、「チモシイ、  
御坊は私の言ふ事を聞かず、餘り多く食ふたから又もや驢馬にお爲

りなされた、併し私が買ふて大切にして上るから、安心しなさい」  
と細語けば、驢馬は耳の中に風の入りたるに心悪し、と思ふたが、  
ブル〜と耳を振つたので、次郎は「チモシイ！御坊は知らぬ顔し  
ても其れは好けぬ、私は御前の毛色を善く知つて居る」とて、其驢馬  
を買ふて歸り矢張りチモシイと名けて、一生大切に飼つて置いたと  
云ふ事であるが、是れは幼稚な人民が、阿呆らしい迷信を懐いて居  
るのを笑つた物語である。

布教資料 因縁百話 終

。驢馬と雲水僧



明治四十三年十二月二十日印刷  
明治四十三年十二月廿五日發行

定價金八拾錢

著作者 吉村雄鳳

東京市芝區露月町十八番地

發行者 今村延雄

東京市芝區露月町十八番地

印刷者 米山加茂吉

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社



發行所

東京市芝區露月町十八番地

鴻

盟

社

電話芝二〇二七番

大賣捌所

東京具葉書院

東京佛教館

名古屋

其中堂

同文光堂



訂正三版出來

禪學の光明

大内青巒居士講述

碧巖集講話

定價 金四圓  
郵稅 拾六錢  
洋裝全貳冊クロス箱入  
▲文字入頗美本

碧巖集は禪門に於ける空前絶後唯一の經典にして五家七宗廿餘流の禪派悉く範を是に  
取らざるは無く觀心修證の蘊奥を究め迷悟昇沈の所由を明にし禪の宇宙觀人生觀倫理  
觀解脫觀は收めて此の中に入り而かも唯その提唱の孤奇峻峭にして文字の傀麗富瞻な  
る之を繙くものをしてその津涯を知るに由ならずむさらば此が解説を試みたる書汗  
牛充棟も當ならざるも一讀の下に文章字句の典據意義を明にすると共にその眞精神を  
明快に解説する者なし茲に於て大内先生深く之を遺憾として幾多の歳月を費し本書を  
著はさる先生の深奥なる禪學は明快の筆と相待ちて説破縱横殺活自在佛祖の肝膽を提  
げ來りて眞に痛絶快絶を極む是れ實に禪學者に取りては闇夜の孤燈霧海の南針と云ふ  
べし

大内青巒居士講話

禪學三二要

定價金參拾錢  
送料金四錢

訂正版

片言隻語直に宇宙人生の眞相を喝破し人間處世の妙諦を提示するは禪學の特色也而し  
て之に關するの書汗牛充棟も當ならざるも最もその要を得たるものを參同契寶鏡三昧  
五位説の三篇とす今や大内居士例の妙辯快舌を以て之を講述せらる痛絶又快絶

大内青巒居士講述

訂正版

六方禮經講話

定價金拾五錢  
送料金貳錢

今や思想界の亂調は普通の倫理道德を以ては到底救濟の力なく進んで宗教的倫理を要  
求するの機運に到來せり而して此の倫理の要領を提示したるものは本書是れなりされ  
ば世の布教傳道に従事するの士は勿論苟も佛教倫理の何物たるかを知らんと欲するの  
諸士に取りては最善最良の指導者たるべし



# ▲東都有力の新聞雜誌は……

●加藤咄堂先生新著

(好評嘖々)

定價

金五拾錢

郵稅

金六錢

## 大乘起信論講話

五千餘卷の經論の精髓八萬四千の法門の要旨は擧げて起信論に在り真如の妙體を論じては佛教哲學の根底を穿ち生滅流轉の相を説きては微を悉くし細を穿ち信仰と道徳を談じては實踐の道程を示し佛教の哲學的宗教的價値は説て盡さざるなし咄堂先生この高尚幽遠の論を講ずるに平易簡明の筆を以てし殊に最新の科學哲學を参照し何人にも解し易く講述せられたるものなれば起信論の妙旨を知るとともに併せて最近の思潮に接することを得べし

### ▲筆を揃へて本書を歓迎せり……

●來馬琢道師著

▲各宗開祖木版十數箇入

增訂  
三版

## 列傳體日本佛教史 各宗高僧傳

洋装頗美本 定價金壹圓參拾錢 送料金八錢

日本佛教の渡來より筆を起し聖德太子役行者傳教大師弘法大師法然上人榮西禪師親鸞上人道元禪師日蓮上人一遍上人等各宗の開祖は勿論各時代に於ける名僧(例せば西行一休澤庵天海隱元白隱の如き)九十餘名の詳傳を著者が椽大の筆を揮ひ犀利の史眼にて記述したるものなり再版を賣盡して品切中の處今回大訂正を加へ明治史を附して第三版を發行せり歴史家鑑定教育家等諸氏の座右に一本を置かれよ



故水野靈牛師著

三版出來即時發送

西國三十三所  
觀音靈場

# 御詠歌說教

定價 金五拾錢  
郵稅 金六錢

觀世音菩薩の不可思議の感應より御詠歌の各首を讚題として此に法譬因を擧げて一文不知の老若男女に至る迄感泣せしむるやうに述べられたるものなり

大内青巒居士著

# 佛敎主義 戊申詔書衍義

定價 金拾五錢  
送料 金貳錢  
▲部數に依り  
有割引乞照會

混亂せる思想界を統一し現代國民道德の實踐要目を示したまへるは戊申詔書なり本書大内先生佛敎主義の見地より深く聖旨の在る所を窺ひ眞俗兩面に涉りて最も明快なる解釋を與へ日本國民として佛敎信者として如何に聖旨を奉戴すべきかを示さる文章例によりて平易通俗の願問として津々浦々の老若男女に至る迄聖旨の在る所と佛敎の眞意を徹底せしめんとす布教師の顧問として檀信徒への高等施本として最も適當なり

# 佛敎大辭典 大藏法數

洋裝 全二冊  
クローズ  
金文字入頗美本  
定價 金四圓  
小包料 金貳拾錢

●(原本七十卷)●菊判千六百餘頁

本書に對する世評「東京朝日新聞」(五月廿九日)の批評に曰く、

本書は往古支那の寂照和尚が勅を奉じて編纂せる佛典中に散在せる巨多の名數、並に漢土の古史中の重要な名數を網羅し(一代經律論釋法數)之に簡嚴明晰なる註解を施したる一部の佛敎大辭典にして之を上下二冊に分ち紙數千六百餘頁にて全編皆高妙の文字なれば佛學者必須の良師たるのみならず苟も世の文學哲學に志ある士人は年中一日もなかるべからざる良書なり、

又、六月一日の「讀賣新聞」は評して曰く、

之れ佛敎一部の大字典、往昔寂照和尚勅を奉じて漢土に之を編みて來、年を経て漸く跡を絶ち、學者をして嘆あらしむる深し、ウエブスター辭書の我國文明に貢獻する多きを見ずや、此書斯學者の良師友となりて將來に資する多きや又知るべき也



増補と  
して  
戊申詔書法話  
を附  
せり

新井石禪老師著

新井老師肖像入

# 修證義說教軌範

菊判クローズ  
製本頗美  
定價  
金壹圓廿錢  
送料  
八錢

本書は曹洞宗安心起行の標準たる修證義に就て新井老師が説教の模範を示されたるものにして丁寧親切なる教理の説明あり巧妙適切なる譬喩感話あり感奮興起改惡遷善せしむべき古今の實例あり更に三十一節各節に適切なる經說祖訓格言詩歌俳諧等を附して實地應用の便を與ふ布教師諸君は以て教壇上の好師友となすべく檀信諸君は老師の膝下において親しく聲咳に接し本證妙修の真髓を聴くの感あるべし全文總ふりがな附何人にも讀み易く解し易し

増補訂正三版出來

佛教界唯一の巨人たる禪師の面目は楮間に躍如たり

性海慈船禪師喜壽祝賀紀念出版

# 永平悟由禪師法話集

定價 金五拾錢 送料 金六錢

現代佛教界の巨人たる性海慈船禪師は法身益清健にして本年喜壽の高齡を迎へさせられ徳風天下に遍からんとす仍て本社は此祝福を記念せんため禪師の法話を蒐集して本書を刊行す蒐録する所のもの片言隻語悉く是れ禪學の蘊奧高祖道の妙味にして親しく膝下に在りて提撕を受くるの感あるべし加ふるに禪師最近の肖像筆蹟詳傳等を以てす禪學の蘊奧を究めんと欲するもの高祖道の妙味を知らんと欲するもの偉大なる人格の感化を受けんと欲するものは本書を繙け更に明治聖代の政治家たる伊藤公爵の信仰及び公の禪師によりて如何なる感化教導を受けしかに至りては唯惟り本書の詳にする所なり



大方禮經講話

定價十五錢  
送料四錢

心地觀經報恩品講義

定價七十八錢  
小包料八錢

仙術

定價三十錢  
送料六錢

般若心經綱要

定價二十錢  
送料四錢

金剛經講解

定價四十錢  
送料六錢

直心淨國禪師御講述  
永平初祖學道用心集提耳錄

定價五十錢  
送料六錢

法華經八卷(縮刷)

定價六十錢  
送料六錢

勝鬘經(縮刷)

定價十五錢  
送料四錢

維摩經(縮刷)

定價二十錢  
送料四錢

吉村雄  
鳳師新  
案各宗  
在家用

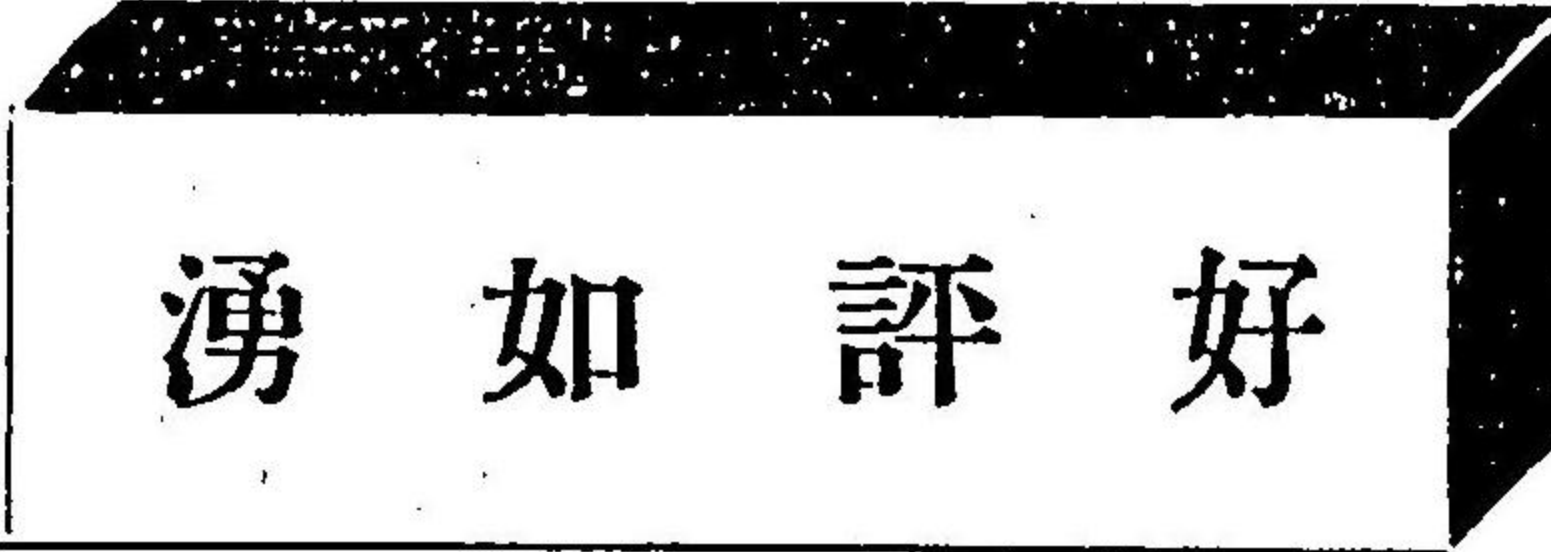
# 過去帖

特製金襴表紙帙入  
金六拾五錢  
上製緞子表紙無帙  
金四拾五錢

弊社の發賣に係る新案過去帖は大に世の歡迎を受け初版數千部直に賣盡し暫時品切の處今回更に改訂再版して茲に發行するの光榮を擔へり請ふ倍舊の御注文あらん事を其體裁内容左の如し

新案過去帖は幅二寸六分長さ五寸八分の折本にして用紙は最上の厚紙を用ゐたれば翻轉に頗る便なり  
新案過去帖は順次戒名及俗名等をユックリ列記し得るやうに區劃を定めれば同向の際見易くして且つ徒らに末頁まで翻轉するの繁雜なきと同時に又其裏面に日割の欄をも設けたれば日々の位牌代用に祭祀する事を得る一舉兩得の考案に基けり

新案過去帖は正確なる年代表を附したれば過去帖中の精靈が歿後幾年を経過せしやは一目瞭然たり故に年回繰出しには實に便益限りなし



好 評 如 湧



新刊豫告

吉村雄鳳師著

觀音經說教

(席三十三敷席)

本書は青年布教家として令名ある著者が『觀音經』の本文を追次贊題として懇切丁寧に縷述せられたる新著にして著者獨得の流暢なる辯舌を艶麗なる文筆に現はしたるものなれば觀音薩埵の妙智力と相俟つて江湖の歸依を受くる事必せり矣愈々出版の曉には請ふ陸續として一讀の榮を賜はらん事を

藏海和尚著

正法眼藏御抄

册二全

定價 小包料二十五錢圓

藏海和尚著

正法眼藏私記會本

册二全

定價 小包料二十四錢圓

黄泉和尚著

正法眼藏涉典續貂

册六全

定價 小包料二十四錢圓

境野黄洋著

日本佛教史要

定價 小包料八錢圓

禪宗辭典 禪林象器箋

册一全

定價 小包料二十五錢圓

瑞方面山

從容錄聞解

定價 送料拾六錢圓

來馬塚道編

通俗佛教各宗綱要

定價 小包料一圓五十錢

梶川乾堂著

唯識論大綱

定價 送料六十錢

梶川乾堂著

俱舍論大綱

定價 送料六十錢

大内青巒著

坐禪儀講話

定價 送料四十錢



毎月一回発行  
毎月一回発行

布教  
雜誌  
傳

道

毎月一定二部  
一年郵税四錢  
發行五厘共錢

護

法

毎月一定一部  
一年郵税十錢  
發行五厘共錢

○御注文の注意○

- 一、「注文」御注文の書籍は前金到着の上ならは一切送附不申候
- 一、「代價」書籍代價は郵送料共御計算の上振替貯金、郵便爲替、郵便切手又は銀行爲替其他御便守に任せ御送の事但し郵便切手代用の節は一割増の事(即ち代壹圓なれば壹圓拾錢封入の事)
- 一、「振替貯金」東京二九七九へ御送金相成候節は最も安全に凡て手数料爲替料等を要せず無料にて送金出来申す可く候されど振替貯金扱の手續上二三日延着致候に付豫め御含み置被下度候但し口座登記料貳錢御加入被下度候
- 一、「送本」御注文書籍は注文狀來着の當日若くは二日以内に發送仕候(即ち本社出版物は其當日他店出版物にして取寄の必要ある者は其の日より二日以内)依て郵送に要する相當の日數を経るも着本無之時は速かに其旨御通知可有之即ち當社にては直ちに取調相當の手續可仕候



